

ご注文はぴょんぴょんな日常です！

イブ\_ib

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

自分の名前は狭山 真樹。

自分は今、木組みの家と石畳の街に向かう列車に乗っている。

本当だつたら自分は、家の直ぐ近くにある高校に行くはずだった……。

こんな事になつたのは父のせいである。

中2のある時、父からこう告げられた。

「真樹よ、お前は世間の事に疎い。

高校になつたら俺の知り合いが

やつてゐる喫茶店に働きにいかせるからな。

それとあいつの店には、小学生の一人娘がいるから同じ屋根の下に住まわせるわけにはいかん。

同じ街の俺の知り合いの家に置いてもらうよう頼んだからな』

進学する高校を大方決めていた時にこれだもの困つてしまふよ。

これは他の方のオリ主に比べ、圧倒的バカな主人公がココアやチノ・リゼ・シャロ・千夜と一緒にバカな日常を過ごすお話です。

!!割とネタを多く含んでいます、もしかしたらあまり好みではない人もいるかもしれません!!

←紹介

## 目 次

真樹 襲撃

1

自分のラテアートを除霊するという靈媒師が現れました、迷惑だから  
追い払いました

I N t h e パン ゲテモノエレクトロニカルパレード

燃えてるところを見るのが好きな自称平和主義者

突撃！今日のおやつは甘兎庵

どんな飲み物でも湯呑みで済ます自称効率主義者

潜入任務に赤い服装で来る馬鹿もいる

うちに泊まるからには捷に従つてもらうよ

捷その2

うちに泊まるからには捷に従つてもらうよ

捷その1

40

うちに泊まるからには捷に従つてもらうよ

◆登場人物紹介有図

バトル三国？ 三国志だね！

保登心愛の災難

疲労困憊

プールのスロープ、ガニ股歩きでゴツグ気取り

樂しみを取る者、極刑也 ★挿絵有り

デジカメコンバットは街のウサギさんを攻める

練習 ★挿絵有り

減らない、体重

マサキの作りしもの

おう、青山仕事しろや

まさか相手がリゼとは思うま

開幕、ラビットホース春のパン祭り！

99

97

94

90

87

82

79

74

69

64

57

52

49

45

街は宝箱。

髪は大体搔き上げる派です。

あの姉来やがつた！

## 真樹 襲撃

自分の名前は狭山 真樹

自分は今木組みの家と石畳の街に向かう列車に乗っている

本当だつたら自分の直ぐ近くにある

高校に行くはずだつた……

こんな事になつたのは父のせいである、

うちの父（名は安佐武《あさむ》）は昔軍にいて輸送などの任務についていた、しかしある時

中東だかの戦いで襲撃を受け

足を負傷しまともに歩けなくなつてしまつた、今はプラモ屋を経営しておりその影響で自分もプラモに夢中で、今思えばあまり外で遊ばない子供だつた

そして中2のある時父からこう告げられた

「真樹よ、お前は世間の事に疎い

高校になつたら俺の知り合いが

やつてゐる喫茶店に働きにいかせるからな」

「ちよつと待つてくれ！　じゃあ

高校の件はどうなるんだい？』

「お前はその知り合いのいる街の高校へ行け、お前の頭でも頑張れば行ける」

「なんてこつたい……」

「それとあいつの店には小学生の一人娘がいるから同じ屋根の下に住まわせるわけにはいかん、同じ街の俺の知り合いの家に置いてもらうよう

頼んだからな」

（ぼかあ置物かよ！）

◆◇◆◇◆◇◆

という訳で進路を勝手に決められた自分はその街の高校に向けて

猛勉強する羽目になつた、

とても辛かつたがその甲斐あつて無事合格し

今、こうやつてその街に向かう電車に乗っているのである

「次は終点、○○ ○○

お荷物のお忘れにお気をつけください」

どうやら木組みの家と石畳の街というのは金沢の小京都とか伊賀の忍者の里の様な感じで呼ばれているらしく、本来の地名もあるらしい

電車に乗っていたほとんどの人が荷物を持ってぞろぞろ出て来る自分も荷物と父がくれた餞別代わりのスケールモデルやザブ○グル、ガ○プラを

持つてホームへ降り立つた

どうやらその住まわせてくれるらしい人、名前は天々座さんの使用人さんが車でお迎えに来てくれているそうだが……

駐車場でウロウロしていると向こうから坊主のグラサン男がやって来た

怖いなあと極力目を合わせないでいると

「すみません……あなたは狭山 真樹様ですか？」

「あ!! え!! はい! そうですが!」

ヤの人だと思ったら彼らが天々座さんの使用人かよ! おつかねえよ!

「貴方が狭山 真樹様ですかい」

「ですかい ですかい」

「ではこちらの車に、荷物は私がトランクに入れますので」

そう言われて案内された車が

まさに本職が乗つてそうな

重厚な黒塗りのクラウンである

ここまで来ると本職が勘違いして撃つてこないか割と本気で心配していた



道中本職が鉛玉をぶち込んで来る事も、力士がデンモクで殴つて来る事もなく無事天々座家へ着くことができた、しかし周りに比べ一際

目立つデカイ家だな

「ようこそいらっしゃいました」

メイドさんや厳つい格好の使用人さんに挨拶されながら挨拶するためこの家の主人である天々座さんの部屋へ向かう

◇◆◇◆◇◆

天々座さんはそこのロン毛で

ヒゲをちようどい感じに生やし、

眼帯をつけているカッコいい方だが、知らない人が見るとほぼマフィアのボスだ

「貴様が狭山の息子か、

これから三年間ここを我が家だと思え、緊張する必要は無いからな」

「はっ！ わかりました！」

「……大丈夫か？ 僕は別にとつて食つたりはしないぞ？」

「はっ！ わかりました！」

「……まあ慣れて行けばいいさ

私の娘も紹介しないとな、来なさい」

そう呼ばれて、隣の部屋から

一人の女の子が出て來た

「私の名前はリゼだ、君は真樹というんだな、これから三年間よろしくな」

「はっ！ よろしくお願ひします！ ……はっ!?」

リゼが困った顔して天々座さんが

苦笑いしていた

「……緊張のあまり何してんのか

分からなかつた……申し訳ないです……」

「まあ誰だつて緊張してやらかしてしまうことはあるさ」

「すまねえリゼさん」

「それじやありゼ、真樹君を部屋に案内してくれないか？」

「解つた、それじや行くぞこつちだ」

そう言われてリゼさんに案内される

荷物は既に部屋に運ばれたらしい

「もう、流石だな、この広さは自分の家の茶の間より広いぞ」

「しかし、これ全部真樹のものか

凄いな」

リゼさんは真樹が持つて来たプラモの山を眺めていた

「これはお父さんの餞別だよ、プラモ屋をやつててね」

「へえー！ これはファイアーフライか！ キングタイガーもあるな！」

「まあ自分はガンプ〇派なんだけどね、何だつたら好きなのやるよ」

「い、いやあ私は見るのは好きだが

作るのはあまり……！ お前！ モデルガンも持つて来たのか？！

見せてくれ！」

「あ?! それはモデルガンじゃないぞ！」

リゼは銃床を見るなりそれを取るが

実はそれは銃床を模した持ち手の傘であつた

「プラモはやるがそれは譲れん

大事なものだからね」

「そうか、しかし面白いものだな  
真樹とは仲良く慣れそうだ……

つと、もうすぐ出かけなければ」

(そういうえば自分も父の友人の店、たしかラビットハウスという店に行つて話をしなければならないんだつた)

「自分も行くところがあつたんだつた、リゼさんはどこへ？」

「ラビットハウスっていう喫茶店でバイトをしているんだ、もし時間があれば真樹も来るといい」

「なんだ奇遇！ 自分もラビットハウスに用があるんだ」

「そうなのか、じゃあ一緒に行こうか」

◆◇◆◇◆◇ラビットハウス

「……、んちは」

「リゼさん……？」

後ろにいる方は?」

(父の話によると彼女がこの店の

一人娘のチノという子だつた筈だ)

「自分は今日からここで働くこととなつた狭山真樹というものです！」

「狭山……、あ 父からきいています…… 制服は用意してありますので早速着替えて働いて欲しいのですが、今はリゼさんが着替え途中ですのでそこに座つてください」

「はい、せつかくなんで何か注文していいかい?」

(これからすぐ働くつていうのに……)

「まあいいでしよう、何にするんですか?」

とは言つたもののメニューはほとんどコーヒーだ、自分はコーヒーは飲めなくはないが滅多に飲まない

どれにしようか悩んでいると一つの

名前が飛び込んで来た

"ワインナーコーヒー"

ワインナー?

ワインナー!

あの焼くとパリッと美味しいワインナー?!

アレをコーヒーにブツ込んだのが!! これはとんだ奇をてらつた  
メニューだ、

……これにしよう

「ワインナーコーヒー1つお願ひします」

「……わかりました」

(見せてもらおうか! ラビットハウスのワインナーコーヒーの実力とやらを!!)

そうして待つてゐる間に

一人の女の子が入つて來た

「うつさぎ～うつさぎ～♪」

「いらっしゃいませ、そしてお待たせしました、ウインナーコーヒーです」

「やつほう、ウインナー！ ウインナー！」

……ん?! ウインナーが無い!!

コーヒーカップの中にあつたのは

ウインナーなどではなくホイップクリームが盛られていた

同時に入つて来た女の子も店内をキヨロキヨロして

「ウサギがない!?」

「ウインナーが無い!!」

二人は同時に叫んだ

その様子をチノちゃんが見て

(なんだ……この二人)

と怪しんだとさ

自分のラテアートを除霊するという靈媒師が現れました、迷惑だから追い払いました

「ワインナー入つてないやないけ！  
ワレエ!!

そう思いながらスプーンで生クリームだけすくつて食べる

「・・・もじやもじや」

「・・・は？」

女の子の方はチノちゃんの頭の毛玉に注目している様だ、「これですか？これはティップーです一応ウサギです、それでゞこ注文は」

「じゃあそのうさぎさん！」

「非売品です」

キツパリ言いよつたねこいつ

◇◆◇◆◇◆◇

「私、春からこの町の高校に通うの」

「そうなんですか、そういうえば

真樹さんも今年からこの町の高校に通うんでしたよね」  
急にこつちに話振ったねこの子は！

「・・・ん、ああ 自分は・・○▽高校に通うんだよ」

自分はそう答えると

「ええっ！君も○▽高校に入学するの！ すごい！これは偶然を通り越して最早運命だよ！」

そう叫びながら素早くこちらへ迫り  
手を掴むと嬉しそうに激しく握手して来た

「ええい！やめい！」

いきなり握手して来た女の子の手を払う

「てことは、お前さんも○▽高校に？」

「そうだよ、それで今下宿先を探してたら迷子になっちゃつて・・・道を聞くついでに休憩しようと思つたんだけど香風さんちつてこ

の近くのはずなんだけど知つてる？」

・・・香風はうちです

え!?

すこーい!!! これは運命どころか

宿命だよ!

宿命になつせりやつたよ！

和にして此處のマジックの點にて

「そうだ、夾山真樹」

「真誠」の心がうかがえる

「うへつす」

あと、高校の方針ですね。

アーティカルな感じよ]

「おせで働くこととてれ」

(二) 事件

「アーティストの事実」

足りてますので、何もしなくて結構です」

「?てことは自分はどうなるの?」

一真樹さんは男ですので力仕事を

す

（力仕事なんて夢に期待しないでくれよ……）

卷之三

(玄ニシテム)

(一) 二三事 (卷之二)

「そつか、チノちゃんは今一人で切り盛りして

「いえ、父もいますしバイトの子がもう一人……」

「私を姉だと思つて何でも言つて!!」

「だからお姉ちゃんつて呼んで!」

「じゃあ、ココアさん・・・」

「お姉ちゃんつて呼んで!!」

「明らかにチノちゃんは困つていた

「早速働いてください」

「任せて♪」

そういうと二人は更衣室へ向かつた  
更衣室にはリゼさんがいるはずだ、  
まあ紹介でもされている時かな

◆◆◆◆◆◆◆◆

どうやら更衣室で一悶着あつた様だが、今度は自分が着替える番だ  
自分が着た制服は如何にも喫茶店のマスターの様な制服だ、自分は  
あまりこんな感じの服は着たことないから少し恥ずかしかつたが  
「似合つてるじゃないか」

「格好いいね！」

「いいです、似合つてます」

「そ、 そうかい？」

「では、早速この荷物をキツチンまで運んでください」

「りよーかい」

料理の材料が入つてゐるらしいダンボールをキツチンへと運ぶ  
「よつこらしょつと」

おつそこそこ重いな

「お、 重い・・・これは普通の女の子にはキツイよ、 ねえリゼちゃん」

急にリゼさんに同意を求めてきたココア  
すると急にリゼさんはダンボールから手を離し

「！ああ、 確かに重いな！」

◆◆◆◆◆◆

「よし、 ココア、 真樹 ラテアートやつてみるか？」

「らてあーと？」

「ラテアートって、カフェラテか何かにミルクで絵を描くやつだつけ？」

？」

「そうだ、この店ではサービスでやつてるんだ」

「あつ！ 絵なら任せて！ これでも金賞をもらつたことがあるんだ」

「町内会の小学生低学年部とかいうのはナシな」

するとココアの顔が固まつた

「図星のようだね」

◆◇◆◇◆◇◆

しゃかしゃかしゃか

「まあ手本としてはこんな感じに・・・」

リゼさんが最初に手本を見せる

「わつ！ すごい上手い！」

「ほんとだ、上手いもんだなあ」

「すごいよーリゼちゃんって絵上手いんだね！ ね！ もう一個作つて！」

「しょ、しょうがないな！」

特別だぞ！ やり方もちゃんと覚えろよ！」

ギュバババババ

ババーン！

スゲー！？

「何だこれ！ 三号戦車みたいだ！」

「いや・・・上手いつてレベルじやないよ、ていうか人間業じやないよ」

◆◇◆◇◆◇◆

「よーし、私もやつてみるよ！」

「がんばれ！」

かちやかちやかちや

「う・・・なんか難しい・・・イメージと違う」

「どれ見せてみ・・・」

ココアが作ったラテアートは

へにやつたウサギのようなもので

その崩れ具合が絶妙に可愛かった

「か！かわいい！」

どうやりり、ゼにはその可愛さに胸撃たれたようだ

◇◆◇◆◇◆◇

「じゃあ、今度は自分だ」

「がんばれー」

かつちやかつちやかつちや

「だめだ、全然出来ねえ」

真樹が描いたラテアートは

めちゃくちゃ下手で邪氣すら放ちそうな代物だつた

「こつ、これは・・・」

「き、気にすることないぞ！真樹、

これから上手くなればいいんだ、な！」

ありがとう、リゼさん・・・

でもその優しさが今は心に痛いよ

その後チノちゃんがラテアートを描いたが、キュビズムのような絵  
ができた

ココアとチノちゃんと自分で

仲間！と言われたがチノちゃんのは  
またレベルが違うやつでは？

◇◆◇◆◇◆◇

「じゃあ今日はそろそろ閉めましょう

「お疲れ様ー♪」

「おつかれー」

「お疲れ様です」

「というわけで私達は着替えてくるので真樹さんはここで待っててくれ  
ださい」

「おけおけ」

◇◆◇◆◇◆◇

天々座邸

その中の一室

「よし、こんなもんかな」

とりあえず机とテレビを置いて

プラモデル類は部屋の隅っこに積んだ

「しかし、今日は疲れたな

この街に来て初日でもう働いたんだもんな

そう言いながらベットへ飛び込む

コンコン

「なあ真樹、入つていいか?」

「どうぞ」

リゼさんが入つて来た

「どうだ?初めて来た日に働いたから疲れただろ?」

「ああ、もうヘトヘトだ

でもなんだかんだでこの街は悪くはないな、綺麗な街だよ

「そうか、それは良かつた」

「だけど、当分はカフェラテは飲みたくないね」

「そうだな、いっぱい練習したもんな」

リゼさんと話をしていると携帯から着信が届いた

「ん? ココアからだ」

『今日はお疲れ様! 明日からも頑張ろうね!』

「へえ、こんなの作つてたんだ、

リゼさんこれぞ覧よ』

そういつてリゼさんにもメールの写真を見せる

「ココア こんなの作つてたんだ‥」

自分は樂しくなる様な嬉しい気持ちになつた

「真樹、これから頑張ろうな!」

「おう、一生懸命頑張つてみるよ!」

「おやすみ!」

こうして真樹の新しい生活が始まった・・・

# I N t h e パン ゲテモノエレクトロニカルパ レード

翌日、

「ああ、嫌だ嫌だ、明日からついに学校だ、しかし行かねばならぬ、  
そうだ学校までの道を歩いてみよう」

思い立つたが吉日、地図を持ち散歩する用意をする

自分の通う学校は明日からだが

リゼさんの通う学校は今日かららしく今しがた家を出て行つた所

だ

そんなこんなで自分も外へ出て散歩へ出かけた

◇◆◇◆◇

しばらくすると広場へ出た、

そこにはなんと至る所に野良うさぎがいた

「うさぎばつか・・・猫とかいないのか・・・？」

そんな事を思つていると向こうから

何故か制服を着たココアが着物を着た女の子を連れ回していた、しかも着物の女の子はヘロヘロで今にも死にそうである

（なんであいつあんな格好してんだ？）

そう思いながら自分は二人に接近する

◇◆◇◆◇◆◇

「ココアちゃんと真樹くんっていうのね、私は宇治松千夜よ、よろしくね」

「千夜ちゃん、この栗羊羹どこで売つてるの？すごく美味しい」

そう言いながらココアと自分は、千夜が出した栗羊羹を頬張る。

「それは私が作つたのよ、

幾千の夜を往く月・・・名付けて「千夜月」！」

（なんかカツコいい！）

◇◆◇◆◇◆◇

ココアと自分と千夜の通う学校が同じということが分かり、学校ま

で案内してくれることとなつた。

しかしども様子がおかしい

自分の持つている高校までの地図と

千夜が案内してくれる道がどうも合わない、もしかしたらその土地ならではの道があるのかも知れない。

「あそこ」に見えるのが学校よ』

(あれが私の新しい学び舎かあ

見てるだけでワクワクしてくるよ)

校舎を見てココアは何か想像を膨らましているようだが、なんか高校にしては小さい気がしないでも無い

そう思いながら校門を見ると

(○○◇立 ◆◎中学校)

……中学校やないかい！

◇◆◇◆◇翌日

始業式、自分は新しい制服を着てしつかりとした足取りで家を出た

「真樹くん！おはよー！」

「おう、おはよう」

「クラスはどうなるのかしら、

三人一緒だと良いわよねえ」

全くだ、自分一人だけ別のクラスに入れられ知り合いもないまま過ごすのは余りにも辛いからな。

学校につき自分は祈るように振り分け表を見る

なんと3人とも同じクラスではないかつ！

「イヨオツシャアーー！」

「三人全員同じクラスでよかつたー」

「私も三人一緒に帰れて嬉しい♪」

歓喜のうちに帰路に着く3人、すると何処からともなく何かが焼けるいい匂いが漂ってきた。

「あついにおい」

「パン屋さんみたいね」

「美味そう」

パン屋を確認するなりパン屋の窓に張り付くココア そして  
一言

「…………かわいい」

「は？」

「パンが？」

「うん！ 実家がベーカリーでよく作ってたんだ、また作りたいなあ」

◆◇◆◇◆ラビットハウス

「大きいオーブンならありますよ、

おじいちゃんが調子のつて買ったやつが」

「ほんと!? ジやあ今度みんなで看板メニュー開発しない？ 焼きたてパン美味しいよ！」

「あ、いいねパン食いたい！」

「こらー！ 話ばかりしてないで仕事しろよ！」

リゼさんは説教を垂れるが

腹の虫が鳴ってしまう

口はそう言つても身体は正直じやねえか！ ラビットハウス春のパン祭り始まるぜえ!! ヒヤツハアー!! ? !! ?

◇◆◇◆◇後日ラビットハウス

千夜が自己紹介をして

パン作りを始める

「みんな！ パン作りをなめちやいけないよ！ 少しのミスが完成度を左右する戦いなんだよ!!」

(おおー・ココアがいつになる燃えている！)

ココアの気迫に押されたのかリゼが

ココアに敬礼をする

「今日はお前に教官を任せた！ よろしく頼む！」

「任された！」

「ココア教官に敬礼!!」

「わたしも仲間に・・・」

「暑苦しいです」



「それじゃあ各自パンに入れたい材料提出ー！」

各自パンの中身を取り出す

その様子を見て自分はほくそ笑む

パンの中身と言えばみんな大半がジャムや餡子など甘いものだ、しかし自分が用意したものは常人が思い付かないもの、

これでみんなを驚かしちゃる!!

真樹のパンの中身比べ四番勝負

一番手ココア

最初から何を考えているかわからないのでどんな具をぶち込むか未知数

「私は新規開拓に焼きそばパンならぬ、焼うどんパンを作るよ！」  
げえ!!最初からこれはダメージがでかい!しかし自分が考えた奴に比べたらまだ焼きそばパンというメジャーなパンの発展型だ!まだインパクトは薄い!!

二番手千夜

自分の店の和菓子の名前を独特のセンスで命名するヤベー奴  
やはり和をメインとしているのか

「私は自家製小豆と梅と海苔をもつてきたわ」

成る程!自家製小豆!自家製というところがポイント高し!

海苔はパンと合わせてもそんなに合わないとと思うがトーストに乗せたものが存在するというから侮れん、

しかし梅干しが未知数だ

三番手チノ

ラビットハウスの一人娘

いつもティップピーを頭に乗せており

物静かな様子が不敵なオーラを放つていて

「冷蔵庫にいくらと鮭と納豆、ゴマ昆布がありました」

うぼあああああ!!!!

心の中の自分が衝撃のあまり数メートル吹き飛んだ

なんて!なんて恐ろしい子!!?!

まさかのいくらと鮭の海産物!

そして匂いの強い納豆!!?!!?

こいつあとんでもないでえ!

千年に一人の逸材やでえ!

負けた、俺はまだ甘ちやんなんや

すっかり灰となつた自分を気にする様子もなくリゼが材料を出す

四番手リゼ

お嬢様学校に通い、軍人の父を持つアツイ奴、軍人の娘だけにレーシヨンはもちろんカエルやヘビなどをだしかねない、この戦いの最重要人物である

「私はイチゴジャムと・・・マーマーレードと・・・」

普通だあーーー!!!

ここに来ていきなり普通だあーー!!?!!?

なんでだあ!!リゼエ貴様はそんな奴だつたのかあ!!?!!?

◆◆◆◆◆リゼ

私は他の三人の異様な材料を見て

(これはパン作りだよな?)

という疑問を持った

残るは真樹だ、あいつはどちらかというとココア寄りだがあいつの事だ、変なものは出すまいと直樹に目を向けた

・・・

そこには

胡瓜の○ーちゃんと○んですよを取り出そうとする真樹の姿があつた

燃えてるところを見るのが好きな自称平和主義者

ゴチウサ 怒りのパン製作

「今日はドライイーストを使うよ！」

「ドライイースト!? 食べて大丈夫なんですか?!」

「ドライイーストは酵母菌なんだよ、これを入れなきゃパンがふつくなしないよー」

(攻歩菌……!?)

チノちゃんさつきからどうしたのだろうか？ まさかドライイーストを知らんとは何と勘違いしているのか？

「そんな危険なものを入れるくらいならパサパサパンで我慢します！」



「パンをこねるのってすごく時間がかかるんですね」

「腕が……もう……動かない……」

「こんなんでへばつてられんよ」

「リゼさんは……平気ですよね」

「なぜ決めつけた？」

「ココアさんは……」

な！ なんだあれはツ！ ココアは燃える人間パン捏ね器と化しているではないかツ！

「このときのパンがもちもちしてて

凄く可愛いんだよ!!」

「凄い愛だ!!」

「こいつ！ 小麦粉キメてやがる!!」

「パンへの愛情火の如くね」

パンをこね始めて暫くして……

「千夜ちゃん大丈夫？ 手伝おうか？」

「！ いいえ大丈夫よ！」

「健気つてやつだね」

「頑張るなあ」

(ココアちゃんに手間を取らせるわけにはいかないもの、皆について  
いけるつて事を見せなきやー!)

「ここで折れたら武士の恥ぜよ!

息絶えるわけにはいかんきん!!」

「健気?」

「真樹はどうだ? お前は男だから平氣だろう」

「もげそう」

◆◇◆◇◆◇

「チノちゃんはどんな形にするの?」

「おじいちゃんです、小さな頃から遊んでもらっていたので……」

「おじいちゃん子だつたのね」

「コーヒーを入れる姿はとても尊敬していました」

そう言うと何故か頭の毛玉が誇らしげな顔をする

「みんなーそろそろオーブン入れるよー」

「……では、これからおじいちゃん

を焼きます」

ノオーーー!!!

爺ちゃん焼かれちゃつた……はて、どこからかダンディーな声が聞  
こえたが……氣のせいしから。

◆◇◆◇◆◇

「リゼちゃんはウサギパン!?」

「焼けたらチョコで顔を描いて完成だな」

「真樹くんは……何これ?」

「……ドムです」

「……どむ?」

「そう、MS—09 ドムです」

「……へえ~」

ココアがハイライトが消えかかつた目でそう答える。  
(やめて!なんかリアクションして!!)

自分の趣味に走り過ぎたことに猛烈に恥ずかしくなつてきだぞ俺、誰か介錯してくれ。

◆◇◆◇◆◇◆

チノちゃんと自分はオーブンへ張り付いていた  
何かを調理している過程を眺めるのは、楽しいものである  
「パンを見ててそんなに楽しいか?」

「はい、どんどん大きくなつてきてます」

「おっ! ココアと千夜のパンが一番大きいな!」

「おじいちゃんもガンバレー!」

「自分のパンが一番小さい……」

「真樹さん! もつと頑張つてください」

「無茶言わんてくれよ……」

◆◇◆◇◆◇◆

「千夜ちゃんにおもてなしのラティアートだよ!」

「まあ! 素敵!」

「今日のは会心の出来なんだ」

「味わつていただくわね」

「そう言つて千夜が飲もうとした時

「あつ! 傑作が……」

ココアが心底残念そうな声を上げる。

(の……飲みにくい)

千夜も困り顔だったので助け船を出してみた。

「チヤ＝サン、ラテアートはね、出された瞬間表面をすするのがサホーデス

「おい、嘘をつくな」

リゼさんに突つ込まれている内に如何やら焼きあがつたようだ。

「焼けたよー! 早速食べよー!」

みんなのパン綺麗に焼きあがっている

が、残念なことに自分の作つたドムパンは焼いてる途中に膨らんでしまい算数セットの花のおはじきみたいになつてしまつた。

「あああ、膨らんでしまった」

「でもおいしいよ！」

「……いけますね」

「パンは美味しいが胡瓜がちよつと……」

「さすが焼き立てだな」

「これなら看板メニューに出来るよ！」

「「「」の」」

「焼きうどんパン」

「梅干しパン」

「いくらパン」

「どれも見事に食欲がそそられない！！……真樹はどうなんだ、そのご  
○んですよパン。」

リゼに問われた真樹は、海苔べつたりの歯茎を見せながら怪しく笑  
う。

「フヒヒ……これはね、無しです。余りにもしょっぱい、塩分過多でこ  
れは死ぬね」

「だろうと思ったよ…」



「じゃーん！ テイツピーパン作ってみたんだ！」

「看板メニューはこれで決定だな」

「食べてみましょう」

「モチモチしてる……」

それぞれ食べ始める

自分はティツピーの顔からかぶりついた  
「むう！ 中に入つてるのはイチゴジャムか」

意外とイケるじゃないかとムシャムシャ食つていてる隣でリゼは  
ティツピーの口や目からイチゴジャムが飛び出しているのを見て  
（……なんかエグいな）

隣で貪り食つてる真樹を獣の類が  
ウサギを捕まえて喰らつてゐるような錯覚を覚えたという。

## 突撃！今日のおやつは甘兎庵

(パン作りでお世話になつたお札に、家の喫茶店に招待するわ)  
という訳で今ラビットハウスの面々で千夜が働く喫茶店に向かつているところだ。

「どんなところか楽しみだね」

「なんて名前の喫茶店ですか？」

「甘兎庵って聞いてるけど」

『甘兎とな！』

「チノちゃん知つてるの？」

「お爺ちゃんの時代に張り合つていたと聞きます」

またこの前と同じ声が……？

◆◇◆◇◆◇◆◇

甘兎庵と書かれた木製看板が、周りと微妙にアンマッチな雰囲気を醸し出している。

「看板だけやたら深い……」

「面白い店だな」

「オレ、ウサギ、アマイ」

「オレ うさぎ あまい……」

「甘兎庵な、俺じやなくて庵だ

ていうか、なんで真樹もココアも同じこと言つてんだよ」

「コレ、ゼツタイ オレウサギアマイ、オレ、ウソツカナイ」

「はいはい、いいから入るぞ」

綺麗な金属音のドアベルが店内に鳴り響く。

「こんにちはー！」

「みんな！ いらつしやい」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「私も抹茶ラテでラテアートを作つてみたんだけど、どうかしら？」

「わっ！ どんなの!?？」

「ココアちゃんたちみたいに可愛いのは描けないんだけど、北斎様に憧れていて……」

画狂老人兀に憧れる少女が描いたラテアートには日本髪の女性が描かれていた。

そして真ん中には何やら文字が……

ココアちゃん

どうして今日は  
おさげやきん？

千夜

「俳句を嗜んでいて……  
「風流だ!!」

千夜さん

いつたい季語は  
どこやきん？

真樹



「メニューは何があるの？」

「はい、お品書きよ」

千夜からお品書きを渡され、それを眺めるがどれもこれも漫画の必殺技の様なものだった

なんだこれは、全くわからん

しかし勘で頼んでみるのも面白そうだ、という訳で俺はこれを選ぶぞ！

「俺はこいつにした!! フロオーブン！ ウエブラー！ グリイ——ン

!!!

「じゃあ私は黄金の鮓スペシャル！」

「そうじやあ私は海に映る月と星々にするよ」

「私は花の都三つ子の宝石で……」

「じゃあちよつと待つててね」

「和服つてお淑やかな感じがしていいねー」

リゼさんが千夜の方をずっと見ていた。

「もしかして着てみたいんですか？」

「いやつ！ そういう訳じゃ……！」

「リゼちゃんならきっと似合うよ」

自分はリゼさんが着物を着てたらどうなるか考えてみた。

うーむ、千夜のような着方より、博徒の姉さんが似合つてゐるな

◆◇◆◇◆◇◆

「お待ちどうさまー」

「きたー！」

「真樹君はフローラン・エバー・グリーンね」

「ほう、抹茶アイスパフェか」

「リゼちゃんは海に映る月と星々ね」

「白玉栗せんざいだつたのか」

「チノちゃんは花の都三つ子の宝石ね」

「あんみつにお団子が刺さつてます！」

「ココアちゃんは黄金の鮓スペシャルね」

「鮓||たい焼きつて無理ないか？」

「あんこには栗羊羹ね」

千夜はあんこに栗羊羹を与えるが

当のあんこはココアの方をじつと見つめている

「どうしたの？」

「こつちのを食べたいんでしようか？」

「しようがないなーちよつとだけだよ、そのかわり後でモフモフさせ  
てね」

と言いスプーンからクリームをすくつてさしだす

するとあんこはそんなものには目もくれずパフェ本体へ突っ込んだ

だ

まるで貴様はスプーンのそれで十分だと言わんばかりである。

◆◇◆◇◆◇◆

「しかしこのパフェ美味しいな」

「うちもこのくらいやらないとダメですね」

「それならラビットハウスさんとコラボなんてどうかしら？ 、きっと盛り上がると思うの、コーヒーあんみつとか♪」

「タオルやトートバッグなんてどうかな？」

「私マグカップが欲しいです」

「エプロンとかも良さげだと思う」

「それだ（です）！」

「いやいやいやいや、せめて真樹は突っ込んでくれ」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「私が下宿先が千夜ちゃんの家だつたらこでお手伝いさせてもらつたんだろうなー」

「今からでも来てくれてもいいのよ、従業員は常時募集中だもの」

「それいいな」

「同じ喫茶店ですし、すぐ慣れますね」

「じゃあ部屋を空けておくから早速荷物をまとめて来てね♪」

「誰か止めてよ！」

「ココア！」

「真樹くん!!」

「g o o d l u c k !!?」

「そんなのないよお♪!!」

◆◇◆◇◆◇◆

「千夜ちゃんまたねー！」

「昔はこのお店とライバルだつたんだよね？」

「今はそんなこと関係ないですけどね」

「私たちもお客様に満足してもらえるように頑張らなきゃね」

「だなー……つて真樹はどこへ行つた？」

「あれ？ さつきまで一緒にいたのに？」

すると後ろの方から何かを抱き抱えながら真樹が走つて來た

「おーい!! 忘れ物忘れ物!!?」

なんと真樹が持っていたのはティップィーだった

「え?! じゃあチノちゃんの頭に乗っているのって……」

チノの頭に乗っていたのはなんと、甘兎庵のあんこだった。

どんな飲み物でも湯呑みで済ます自称効率主義者

——天々座邸——

リゼは何か飲もうと思い、キッチンへ向かった  
「あ、リゼさん、リゼさんもコーヒー飲むかい？」

「ああ、じゃあ頼むよ……お前何に入れて飲んでいるんだ？」

「え？これ？これは家から一緒に持ってきた湯呑みだよ、お気に入り  
でね

コーラもジュースもコーヒーもこれで飲んでる」

「えええ、お前流石にそれは……」

そうだ、明日学校が終わつたら

ココアとチノとでカツップを

見に行くんだ、せつかくだから真樹も一緒にこい

（別にコーヒーカツップとか  
いらんのだが）

「わかつたよ、見に行くよ」

◆◇◆——翌日——◆◇◆

学校が終わると高校生3人と

中学生1人うさぎ1羽が店をマスターに任せカツップを買いに行く  
こととなつた

「あの店が良さそうだな」

「わー！かわいいカツップがいっぱいー！」

「あんまはしゃぐなー」

そういうや否やココアは駆け足で店内を歩き回る、好きなものが  
いっぱいある空間で早足になるのは良くわかる

そしてココアは足を引っ掛けたのか

そのままタンスに衝突する

リゼさんは倒れたココアをキャッチ

チノはタンスから落ちてきた壺をキャッチした

（（予想を裏切らない！））

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

ココアは商品を手に取ろうとして  
手を伸ばしたが別の客の女の子もそのカツプを取ろうとしたらし  
く、手が当たってしまう

ハツ・・・

二人はしばらく固まつたように  
見つめあつていた

「こんなシチュエーションマンガで見たことがあります」

「よく恋愛に発展するやつだな」

(女の子同士か、へへへ百合か悪かねえぜ、これは百合の花が咲き乱れ  
そうだ)

「真樹・・・おまえなんでそんな気味の悪い顔してんのだ？」

おつといけない

◆◇◆◇◆◇◆

「あれ、よく見たらシャロじやん」

「天々座先輩!？」

金髪ウエーブの女の子は  
かなり驚いた様子だ

「どうしてここに・・・」

それにして驚きすぎである

「喫茶店で使うカツプを買いに来たんだよ」

「そうだつたんですか」

「シャロは欲しいものあつた?」

「私は見てるだけで十分なので」

「この白く滑らかなフォルム・・・

ほへえ〜〜

「w a k a r u 　　ここのかツプの反り具合もたまらない、このカツ  
　　プなんて

ラツパみたいな感じで好き」

ここで急に真樹が食いついてきた

「でしょ！　特にこのカツプの持ち手にこだわっている所とか、香り

が広がるようを作られているところがたまらないわ！」

「こいつあたまんねえや・・・」

戦国時代に武将達が茶器に夢中になっていたのが分かる気がする・・・

その例えはどうなんだろうか？

リゼは心の中でそう考えた

「二人とも変わった趣味ですなー」

「えつ、お前が言う？」

◆?◆?◆?◆

「二人は学年が違うのにいつ知り合ったんですか？」

「私が暴漢に襲われそうになつた所を助けてくれたの」

「へーかつこいいね！」

鉄砲を持つて

この私が断罪してくれる！とか?!」

「リゼさんの事だから相手の腕の一本や一本・・・」

「そんなこと言つてないし！」

腕の骨も折つてない！ 本当はだな・・・」

事の経緯はこうだ

道の真ん中に不良野良うさぎがいて  
うさぎ嫌いのシャロは通れずにいた  
そこにリゼが来て追い払つてくれた  
という流れだ

話が終わつた後 チノ ココア 真樹  
はシャロの方をじつと見ていた

「なによ！ うさぎが怖くて悪い?!」

◆?◆?◆?◆?◆?◆

「そういうえば、この前カップの中にうさぎが入つてゐる写真見たんだ!  
可愛かつたー♪」

「窮屈じやないのか？」

「ティツ。ピーも入つてみたら注目度アップだよ！」

「流石にあのうさぎが入るカップはないだろう」

「ありました

「あんのかい！」

チノちゃんは特大のカフエオレボウルをもつて来た  
その中にティップスを入れてみるが・・・

「・・・なんか違う」

「ご飯にしか見えないです」

カフエオレボウルに入った白いティップスは見事な程ご飯そのもの  
のであつた

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「あのカツプおしゃれだよー」

ココアの指差すお洒落なアンティーク物のカツプがあつたが値段  
が五万円とべらぼうに高かつた

「あれ、これ・・・」

「昔、的にして撃ち抜いたやつじyan」

(え？カツプを撃ち抜いてって

どんな威力よ？改造エアガン

それとも実弾？金○恩伝説か？)

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「チノちゃん、お揃いのマグカツプ買おうよ」

「私物を買いに来たわけじゃありませんよ」

そんな会話を聞きながら自分は手頃でかつたくさん量を注ぐこ  
とができるマグカツプを選んだ

「リゼ先輩！こつこのカツプなんて

色違いで可愛くないですか？」

二つセットですし片方いりませんか？！」

そういうと本来恋人用のカツプをリゼに見せに來た

「あ、これ可愛いな」

(つてよく見たら恋人用？！)

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「シャロちゃんつて高いカツプ詳しくてお嬢様つて感じだね」

「お嬢様?!」

「その制服の学校は才女が多いと聞きます」

「おまけに美人さんだし最高だねー」

「それにカツプを持った仕草に憂雅で言

(ただ持つてゐるだけなのに・・・)

一髪もカールしてて風格があります】

(癡毛なんだけど)

「……はい、ビアとか食へるんでですか？」

「んう私がよく食べるのは・・・」

「ジャンクフード？」あとレーショ

るものつていいよな」

「わかります！卵かけご飯とか

美味しいですよね！」

「おとと卵でギヤビノのことだよ」

か

「そんなもの毎日食うてどうの痛風になりますね」

A vertical column of nine diamond shapes, alternating between white and black.

潜入任務に赤い服装で来る馬鹿もいる  
絵有り

★ 插

今日も1日がんばるぞい！

チノちゃん、ココア、リゼさんに自分と四人まとめて働いていたがそんなにいてもすることが無いので自分は小麦粉やら豆やら運んでいたのである

「みんなー!! シヤロちゃんが大変なの!!」

何事？

突如 千夜が息を切らして飛び込んで来た、霧囲氣的にただならぬ緊急事態のようだ

「コーヒーでも飲んでリラックスしなよ」  
とりあえず千夜にコーヒーが出される

A vertical column of six diamond shapes, alternating between white and black.

「へえー、千夜ちゃんとシャロちゃんつて幼馴染なんだ」「そうなの」

これは初耳だ  
全く別の経緯であつた人達が知り合いたなんて  
世

「だけど、昨日こんなチラシを持つてきて・・・、きっと如何わしいお店で働いているのよ！」

「なんだいコレ、しわくちゃでまるで紙屑じやないか」と、そう言いながら手に握っていたチラシを差し出す

余程慌てていたのか、チラシは

「どれどれ、心も体も癒します・・・か、ふ・・・ほにやらう

ドウ・ラパン・・・?

するとリゼさんがチラシを覗きにきて

「お前・・これフルール・ド・ラパンつて読むんだぞ?」

「えつ?! あ、ああラパン! ラパンね、ラパン

・・・

はつづかし!

(フルール・ド・ラパンつて、名前で釣つてるけどただの喫茶店じや・・)

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「どうやつてシャロちゃんを止めたらいいの?」

「仕事が終わつたらみんなで行つてみない?」

「侵入ですね」

侵入、そのワードに心無しかりリゼさんが反応した気がする  
「お前らあ! ゴーストになる覚悟はあるのか?!」

「ちよつとあるよ」

「潜入を甘く見るなあ!

よし! 私についてこい!!」

「「「いえっさ!」」」

リゼ隊長の激励により、我々の隊は

これ以上になく高まつていた

祖国の為、我々スペースノイドの独立の為、単身ジャブローへ潜入  
し

爆弾を小脇に抱えて敵将レビルを  
爆殺できる、

そんな気すらした

ただの異常者である

◆◇◆◇◆◇◆

「じゃあ仕事も終わつたし、いよいよ潜入するぞ、準備はいいか?・・  
おい? 真樹はどうした?」

「やあおまたせ」

「真樹さん・・なんで、ダンボールなんて持つてきてるんですか?・・  
いや、だつて侵入するんでしょ

ダンボールぐらい欲しいかなあつて思つて・・・  
結局邪魔になるという事で、ダンボールは置いていくこととなつた、

残念！

◆◇◆◇◆◇◆

フルール・ド・ラパン前

「ここみたいだね」

「いいか、慎重に覗くんだぞ」

「「「「セーのつ」」」

果たして、そこには!!!

「いらっしゃいませ！」

そこにはミニスカメイド服に垂れ耳のウサギのつけ耳をつけた  
シャロガ

接客スマイルで挨拶をしていた

するとシャロガこつちに気づいた

「なんでいるのーー!!」

建物越しでも聞こえるぐらいの声量で叫んだ

「・・・っ!?バカな！もうバレてしまうとは！」

そう思いながら隣を見ると・・・

ああ、そりやバレるわな

チノちゃんの頭にはいつも通りあの白い綿が乗つかつていた

これではチノちゃんがどんなに目立たなくしようとも綿は見えて  
しまう

ココアに至つては顔を堂々と出している、隠れる気ゼロ  
狙撃手に撃つてくださいと言わんばかりである

◆◇◆◇◆◇◆

「（）はハーブティーがメインの喫茶店よ、ハーブは体に良いいろんな効能があるの」

（心も体も癒すつてそういうこと・・・）

(合法ハーブ・・・)

「大体こんなチラシで勘違いしたの誰よ・・・・」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「せつかくだからお茶してつてもいいかな?」

「しようがないわねー」

「なんじやこりや、ハーブティーなんて全く知らんぞ  
やつぱダンディ・ライオンだよね!」

「飲んだことあるんですか?」

「ライオンみたいに強くなれるよ!」

「たんぽぽって意味わかつてないな」

◆◇◆◇◆◇◆

「迷うならそれに合ったハーブティーを、私が選んであげる」

「ココアはリンデンフラワーね、リラックス効果があるわ」

「千夜はローズマリー、肩こりに効くのよ」

「チノちゃんは甘い香りで飲みやすいカモミールはどう?」

「真樹は目の疲れが取れるアイブライトなんてのはどうかしら?」

「リゼ先輩は最近眠れないって言つてましたから、ラベンダーがオススメです」

「あつ、ティップには難聴と老眼防止の効能があるものをお願いします」

「ティッピーそんな老けてんの?」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ハーブが入ったポットにお湯が注がれる

「お湯を入れたら赤く染まつた!」

「きれーい!」

「いい香りです」

「なんかスツーつてするね」

「ハーブを使ったクッキーはいかが

でしよう?私が焼いたんですけど・・・・」

「シャロが作ったのか、

・・・おいしい！」

リゼさんのお褒めの言葉をいただき  
シャロは顔を赤くした

(シャロちゃんが真っ赤に！)

(こっちの方が見てて面白い・・・！)

◆◇◆◇◆◇◆

「ココア、ちょっとそのお茶飲ませて」

「いいよー」

自分は他のお茶も気になり、ココアが飲んでいたお茶を少しもらつた  
ポットからお茶を注いで飲んでいると、シャロがクッキーを持って  
きた

早速クッキーを一つ取り口の中に放り込む  
・・・ん?

甘くねえぞコレ

もう一つ食べてみるがやつぱり甘くない

更にもう一つ 今度はテーブルに置いてあつた角砂糖を乗せて食べるが

それでも感じない、味覚が馬鹿になつたのだろうか?  
「真樹くんどうしたの? そんなに食べて?」

「いや、なんか甘くないんだよ・・・こういうクッキーなのかな・・・」

ココアも一口かじつてみる

「・・・ほんとだ、このクッキー  
甘くない・・・」

千夜も一緒に食べるが

「そんなことないわよ?」

「うーん、おつかしいな 」

「ギムネマ・シルベスターを飲んだわね」

急にシャロがカツコつけてなんか言つてきた

「それは飲むと一時的に甘みを感じなくなるのよ！」

「そんな恐ろしい効能が  
・  
・  
・  
?!」

ほらあ！恐ろしさのあまりココアの声が震えてるじやん！

「シヤ田ちゃんはタイトでよく飲んでたのよね」

言葉の力

•  
•  
•  
•  
•  
•

「たくさん飲んじゃつた」

「お花の中で花が咲きそうだったよ！」

「少し元気になつた気がします」

「確かにリラックスしたけど、

「流石にアラシーホ効果だろー」

それぞれ席を立つ

「ココアさん、そろそろ帰りますよ・・！　ココアさん寝てる！」

ハーフマニア

その後家に帰宅後、個人的にハーブについて調べた

ミントについて驚愕な事がわかつた

ミントはとてももない繁殖力があるという事を!!

そのミントが後にひと騒動起こすのだがそれは暫く後の話

うちに泊まるからには捷に従つてもらうよ  
捷その1

今日は雨である

「今日は雨でお客さんあんまり来ないねー」

ココアは残念そうに外を見る

「二人ともこんな天気なのに遊びに来てくれてありがとね」

「ちょうどバイトの予定が空白になつただけだし」

「でも私たちが来た時は晴れてたのに・・・」

「誰かの日頃の行いのせいね」

シャロはため息をつく

「シャロちゃんが来るなんて珍しい事があつたからかなー」

「えっ!?」

◇◆◇◆

こんなやりとりがラビットハウスで行われていた時真樹は何をしていたというと・・・

「うわあー！クソがあ!!

折りたたみ傘持つてくんだつたああ!!」

学校が終わった後クラスの奴らと

本屋に行き、その帰りだつた

「ちようどこの辺りにラビットハウスがあつたはず！雨宿りさせてもらおう！」

たのもーー!!

「いらっしゃいm・・・真樹くん！」

大変！ビショビショ！」

「ご覧の通り、雨に降られたよ」

「真樹さん、これ使つてください」

チノちゃんがバスタオルを渡してくれた、申し訳ない  
「真樹くく♪どうしたのく

ビショビシヨ♪

「なんだこいつ」

明らかに

シャブを使ったテンションだ  
さしづめシャブキメシャロ太郎といったところか

「なんなん?こいつ?」

「いや、シャロはコーヒーで酔う体质のようではな・・・」

まじかよ

「チノちゃんフワフワ♪」

「これココアが二人になつたもんじやないか」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「雨激しくなつて来たねー」

「風も強そうです」

「参つたね、天気予報じや当分は雨は止みそうにないようだよ」「それじゃ迎えを呼ぶから家まで送つてつてやるよ」

「いえっ!私が連れて帰るわ!」

えらく慌てて千夜がシャロと一緒に帰ると言つてきた  
「じゃあまたね」

「おい!?無理すんな!」

シャロをおんぶして外へ出るが

千夜の体は震えている、こんなんじや歩けてせいぜい数メートルが

関の山だ

「千夜ちやーーん!!」

「ほら見ろ!言わんこつちやない!」

シャロをおぶつた千夜は倒れ

雨に打たれていた

◇◆◇◆◇◆◇

びしょ濡れになつた二人を回収し、  
風呂へ入れる事となつた

「ごめんなさい」

「いつの間にびしょ濡れに・・・」

「・・・えっと、今日は泊まつてつてください」

「今まで泊まつて良かつたのか?」

「構わないですよ」

「リゼちゃん緊張してるー」

「うんうん、で自分はどうしたらいい?」

「父から許可をもらつてますし

今日は泊まつてつてください」

「?!? ふーん? !!? ツフウウン?!?」

いやいやいや年頃の女の子五人

と一緒に寝ろというのか?

仮にもワシ 男の子やぞ?

「大丈夫ですよ、真樹さんがそんな  
事をする人間だとは思つてません」

チノちゃん・・・

「そうだよ! 真樹くんがひどい事するはずないもん!」

ココア・・・

「ああ、だけどもしなんらかの行動を起こしたら真樹、お前の息の根を  
一発で止めるからな」

リゼさん・・・怖いよ・・・

◇◆◇◆◇◆◇

という訳でチノちゃんの部屋へ通された

「チノの部屋つてチノつて感じだなー」

如何にも女の子らしい色使いのお部屋だ、色がちゃんとチノしてい

る

「ほーーん、これがボトルシップ・・・器用なもんだ・・・

ボトルシップ眺めていると

部屋から出てたココアが

何故かチノちゃんの制服を着て戻ってきた

「じゃーん チノちゃんの制服着てみたよ!」

「おめえ！ツンツルテンじゃねえかよ！」

「でも、そのまま学校に行つても違和感がなくて心配だ」  
まあリゼさん凄い皮肉

「ホント?! ちょっと行つてくる」

「真に受けたぞあいつ！」

「待つてください！外は大雨です！」

「そういう問題じやない」

◆◆◆◆◆◆

ココアが制服から着替えて話をする

「このままぼつーとしてもつまんないから、なんかジャンケンしようよ」

「ほう、ジャンケンか平均的勝率の自分に勝てるか？」

「やる気だね！リゼちゃんとチノちゃんもやろうよ！負けた人が一番最初に買った人の命令を聞くつてのはどう？」

「望むところよお！」

「おい、勝手に安請け合いして大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

「真樹さん、それフラグです」

「それじゃあ行くよー！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「やつたー！私がリゼちゃんに命令するよー！」

「くつそおー！ 煮るなり焼くなり好きにしろおー！」

「じゃあねーリゼちゃんがチノちゃんの制服を着て！」

「「?!」「

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

というわけでリゼさんが着替え中なので 廊下で待機中の僕です

「オーライ、まだかい？」

「ちよ、ちよつと待つてくれ／＼／＼

「まだかなあ・・・」

そう呟きながら座り込んだ

――――

「あら？ 真樹くん どうしたの？」

「あんた、何かやらかしたんじゃないでしょうね？」

「いやね、カクカクシカジカ」

「ええっ！！リゼしえんぱいが?!」

「?!この声はシャロか！まつ！待つてくれ！」

「真樹くーん！入つて来ていいよー」

「へいへへーい！」

部屋に千夜 シャロ そして真樹がなだれ込んだ

そこには チノちゃんの制服を着て

ココアの時よりももつと際どい姿となつたりゼがいた

ドタドタ

うちに泊まるからには捷に従つてもらうよ

捷そ

の2

「ほわあああ〜〜！」

そのリゼさんの姿にシャロは奇声を上げる

「わああああ！！ 見るな〜!!」

リゼさんは見られまいとカーテンに包まるが

「ええい！ ジャンケンに負けたのだ！ 神妙に致せ！」

「じゃありゼちゃん、私はチノちゃんと一緒にお風呂に入るから♪」

「ココア！ 逃げるな〜！」

「すまんかつたね、じやあ自分も廊下に行くから、着替えなさいな」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

というわけでお風呂は最後に

手ぬぐいと着替えの体操着を片手に

風呂へ堂々と入場

一通り体を洗い風呂を覗く

「うーむ、ココアの香り」

甘い匂いだ

「さーて、入りますか・・・いや」

いまこの風呂は年頃の女の子（しかも美人）五人が入った風呂だ、その道の紳士に売れば億は下るまい、そんな風呂に果たして入つていいものか・・・

いや、しかし自分はここに来る途中で雨に濡れており、走ってきた

め

体が疲れている

（疲れどりたいのに〜）

なんだ？ 何処からともなく阿部サダヲの声が！

体が勝手に浴槽の中に！

ザブーン！

はいつてしまつた、はいつてしまつたもんはしようがない！

フヘヘヘヘ

勿論入る前にしつかり身体洗いましたよ?

「あと50年は寿命が延びたよ」

「なんかいいこともない」隻は貰やかになつたれ

だけど  
・  
・  
】

「とびきりの怪談を教えて♪」

恋をしたような瞳で言うなや

「怪談ならうちのお店にありますよ」

「ノゼヤさんとロロア

いて聞いてください」

思わず自分は身

この喫茶店は夜になると・・・

八九二

あるんですね】

(夢を壊せねえ・・・)

「では次はリゼさんの番です」

「もう終わり!?」?

「使用人!？」

使用人から聞いた話ですかい、ですかい

「仕事を終えて帰ろうとする　ゆつくりと茂みの中から何かが地面を這つて近づいてきたんだ　、使用人はあまりの恐怖に逃げ出し　たんだ」

才ホホー 意外と怖いね

「まあ、本当は匍匐全身の練習をしていた私だ」

「バテしちやだめじやん！」

んだよ！台無しだあ！

「……とおきの話があるの  
切り裂きハピットっていう実話なんだけ  
ど……」

千夜か話をしようとした時  
近くに雷か落ちた  
そして停電してしまった！

「わ!  
!?

「うあつ!? 消えた！」

「てつ停電?!」

「バーの方大丈夫かな!?」

「落ち着いてください、こんな時のために・・・」

チノちゃんが蠅燭に火を灯した

よりによつて田ウソケか・・・」

暗闇に千夜の顔が不気味に照らされ  
切り裂きラビットを語り始めた

A vertical column of nine diamond shapes, alternating between black and white.

こわい、思つたより怖かつた

正直舐めていたね、これは眠れないわ

シヤロヒロアは震えてすうい

「今日はもう寝ましょー

とりあえず寝るところはチノのベットと布団が2つ用意出来たの

で、

一枚に二人寝ることになつた

ココアとチノ

千夜とシャロ

そしてリゼさんと自分だ

「えへへーみんなといふと楽しいね、そわそわして寝れるかなー」

「早く寝ないと明日起きられませんよ」

千夜ちゃんはそう言つてゐるが明日は土曜だ、少しばかり長く寝ても許されるだろう、まあチノちゃんは喫茶店の仕込みとかあるだろうから早く起きないといけないかもしかんが

◆◇◆◇◆◇◆

「おはようございます」

「おはようチノちゃん」

「シャロちゃん寝言で今日は特売なのーつて・・・」

「そそそそんなこと言つてもここで言うなー！」

「おい真樹も起きろ、朝だぞ」

「ううーああん？　ああ　あわかつたわかつた・・・」

寝ぼけながら適当にそう言つた後また布団に倒れる  
「全然わかつてないじやないか！

いいから起きろ！」

リゼさんは無理矢理布団を引張剥がす

「まつたく・・・そういうえばココアは？・・・!？」

リゼさんの視線の先にはドアの前に  
ダンゴムシみたいに丸まつてゐるココアの姿であつた

「なんであそこにいんだよ・・・」

チノちゃんのベットに寝てたはずだろ・・・

「匍匐全身の夢でも見ていたのでしよう

風邪を引くだろうにココアの顔は

幸せそうな顔をしてゐた

## 僕にだつて悩みがあるんだ ◆登場人物紹介有☒

学校

「ねえ、真樹くんちよつといいかい？」

「うん？ どした？」

今日も昼休みに一人で本を読んでいる時にクラスメイトが話しかけてきた

「ちよつと悩みがあつて、聞きたいことがあるんだ」

「ほう悩みとな、なんでも話してみい！」

「…僕にはさ、妹がいるんだよ

中二の」

「ふんふん」

「妹の性格はさ、基本的に乱暴なんだ 親からはまるで僕が姉ちやんで

妹が弟みたいだつてよく言われる」

「まあお前はクラスの中でも大人しいやつだよな」

「それでさ 休みの日に下宿先から帰つても、全然話ししてくれないんだ、それどころかさ…パシられるんだよ…」

「お前中二の妹にパシられるつて

大丈夫か！ 兄の威厳はどうした！」

「うん、だから僕も怒つて喧嘩になつちゃうんだけど、CQCだーつて言つてねじ伏せてくるんだよ…」

ねえ、真樹君 CQCってなんだい？」

「…そ…? CQC?

知らないな、QCサークルは知つてるんだが」

QCサークル（キューシーサークル）は、同じ職場内で品質管理活動を自発的に小グループで行う活動である。全社的品質管理活動の一環として自己啓発、相互啓発を行い、QC手法を活用して職場の管理、改善を継続的に全員参加で行うものである（TQC用語辞典に基づく解説）

「よくわかんないけど 戰いの方法なんだろ？ まあ元氣出せよ、帰りにお前の下宿先のパン屋に寄つてつてやつからよ」

「ありがとう、相談に乗つてもらつて悪かつたね」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ありがとうございましたー」

そのクラスメイトが働いている

パン屋でフランスパンを5本奮発して買つたが、こんなのが全部食つたら

口の中がズタズタになるな

「やれどうすつかな・・・」

悩みながら歩いていると、道端で震えている千夜に出会つた

「おーい、千夜！ ちよつといいかい？」

「あつー真樹くん、大変なの！」

チノちゃんが、暑さのせいで

暑さのせいで！」

「おい？ どうした？！」

千夜はそう叫ぶなりあらぬ方向へと走り去つてしまつた  
「何があつたんだ・・・」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「 フランスパンとはいえ五本は

持つてるのつらいな、少しここで休むか」

「あんたそんなにパン持つてどうしたのよ」

休んでいると通りかかったシャロに声をかけられる

「いやね、幸の薄いクラスメイトの為に一肌脱いだわけですよ、  
でもね、こんなにフランスパンを食べられない、・・・せつかくだか

ら

三本ほどシャロにやるよ」

「ええつ！ いいの?!」

「こんなに食いきれないし、

多かつたら他の人に分けなよ！

それじゃ！」

せつかくのなのでシャロに

何本か押し付けた、華麗な不要物の始末方法である

◇◆◇◆◇◆◇◆

その後・・・

シャロから口の中が痛くなつたと苦情が来たのであつた

# バトル三国？　三国志だね！

学校

「お前ら、今日テストが返されたからって急げないでちゃんと勉強しろよ、成績がよかつたやつも同じだからなー」

「「はーい」」

(ああああ、危ねえ!!?!!?)　数学赤点ストレスレだつたわ!!)

英語	42
歴史	78
国語	50
数学	32
物理	42

でもまあ赤点じゃないだけ良かつた

そう思いながらリュックにテストを入れているとココアがやつてきた

「真樹くん！テストどうだつた？」

「正直ギリギリだつたね、でも

赤点がないだけ良かつた・・・ホントに・・・」

「いいなあ 赤点が無くて、そうだ、今日千夜ちゃんと図書館で勉強するんだけど一緒にどう？」

こいつ何気に赤点アピールしたな

しかし千夜とココアか、二人揃つて頭がホンワカパツパな奴等だが

大丈夫か？

◇◆◇◆◇◆◇

「あ、ココアさん」

「チノちゃんも図書館に行くの？」

「ええ、小さい頃に読んだ本がもう一度読みたくなつてので」

「じゃあ一緒に行きましょ」

◇◆◇◆◇◆◇

「シャロちやんだ！ 今帰り？」

「図書館に本返しに行こうとしたところよ」

「それなら私たちと一緒に図書館で勉強していかない？」

「えー……」

と、シャロは露骨に嫌な顔をするが……

「そ、そんなに言うなら教えてあげてもいいかな？」

「そこまで言つてないよ！」

一緒に勉強から教えてあげると

話が飛躍していた

◆◆◆◆◆◆◆◆

「チノちゃんもいるの？」

「私は小さい頃読んだ本がもう一度読みたくないって……」

「ワイもいるで」

さらにチノの後ろから真樹が出てきた

「アンタもいるの?!」

「なんだ、迷惑か？ それでさつきからチノちゃんが小さい頃読んだ本つてなんなの？」

「えっと……正義のヒーローに憧れていたウサギが悪いウサギを懲らしめるんですが、関係のないウサギまで巻き込んでしまって大変なことになってしまふんです、主人公を追うウサギまで現れて：途中戦つたりするんですけど……そして最後が……」

((そんなに内容が覚えてるのにまた読みたいんだ))

(わかる、わかるぞチノよ、いい話は何回でも読みたいよな、アニメだつてそうだ筋を覚えてても何回も見る、その話が好きだから……)

◆◆◆◆◆◆◆◆

「チノちゃんはテストが近いって言つてたよね、それならシャロちゃんに教えてもらつたら？」

「特待生で学費が免除されてるくらい優秀なの」「すごい！」

「美人で頭がいいなんて」

「非の打ち所がないです」

「おまけにお嬢様なんて、なんて完璧なのー」

「この前フランスパンやつたけど

貧乏人からもらつても嬉しくねえよな！悪いことしたよー！」

四人は手で目を覆つた

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「わーこの図書館大きいねー！」

「こんなところで地震が起きたら  
生き埋めだね」

「なんでアンタはそんな嫌なこと言うのよ」

◆◇◆◇◆

「このへんでいいかしら」

「じゃあココアちゃん今日はよろしくね」

「え？ 千夜が教えてくれるんじゃないの？」

「ちがうちがう、私が教えてもらうの」

「私、数学と物理が得意なんだー」

「嘘でしょーーー?!」

「マジか!? じゃあココア自分にも数学を教えてくれ！」

「いいよー」

「だけど、それならココアがチノちゃんに教えてあげれば良かつたん  
じゃない？」

「ココアさんは教え方がアレなので頼りになりません」

「そうなの？ わかりやすいのに」

「千夜さんはきっと波長が合うんです」

「総合順位が平均以下だしね・・・」

「そんなに足を引っ張る科目があるの？」

「本はいっぱい読むんだけど・・・」

そういうとココアはテストを見せた

英語 12点

国語 18点

歴史 23点

(文系が壊滅的！)

◆◆◆◆◆◆◆◆

というわけで歴史をココアに教えている真樹である

「縄文土器は縄の模様がついてて、

弥生土器はスベスベって感じで覚えとけばいいんだったと思うよ」

「ふんふん」

「前方後円墳は鍵穴の形、死者を埋葬する壺の形とも言われてるらしいよ」

「なるほど」

すると向こうで勉強していたシャロとチノちゃんがこんな会話をしていた

「チノちゃんみたいな妹がいれば毎日だつて教えるのに」

「私もシャロさんみたいな姉が欲しかったです」

この言葉にココアは傷ついたらしく

「私いらない子だああ!!」

と叫ぶなり外へ走ってしまった

「図書館では静かに」

ホントだよ

「だけど真樹くんは色々知ってるのね」

「授業中も関係ないところでも読んでるからね、覚えちゃう そう

だ、ココアのために此処にある本数冊使えそうなの選んでくる!」

「行っちゃつた・・・」

◆◆◆◆◆◆◆◆

「先輩のリゼちゃんもよんだら勉強教えてもらられるかしら」

千夜は携帯を取り出しリゼを呼ぼうとするが

「わたし、リゼちゃんにお願いしたことあるんだけどねー」

(「家庭教師? いいけど・・・じゃあいくか」)

(「へ?どこへ?」)

(「徹夜に耐えられる体力からつけなきやな」)

「・・・って、言つてたよ」

そういうと、千夜は何も言わずに携帯をそつとしまった

◆◆◆◆◆◆◆◆

ついさつき、ココアがチノちゃんと一緒に絵本を探しに行つて何故か罪と罰を持つてきたのだが、真樹は一向に戻つてこない

「真樹くん遅いね、ちょっと私探しに行つてくるよ！」

そう言つてココアが飛び出して行つた

その後漫画コーナーで歴史マンガを  
片つ端から読んでた真樹が見つかった

## 保登心愛の災難

天々座邸

いま自分は天々座さんとリセさんと一緒にご飯を食べている

「どうだ？ 美味しいか？」

「とても美味しいです」

冗談抜きてこれば美味しい

۶۷

「いえ！このぐらいで十分なんで！」

二看ぐらいの前の男が這廻りながら

「えつ！？」

——夕食後——

自分は厨房で水を飲んでいた

「うーえ、食い過ぎた・・・」

(あまりに食い過ぎて食後に虫)

たのは残念だったな)

「おとこはかうてうたふ  
わ、眞諦こころはうつむく

「なこしこ来た？」

「いや、なんでもないぞ？・・・」

「そうかい？ まあいいやじやあ自分は寝るかんね、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

A vertical column of nine diamond shapes, alternating between white and black.

今日は四人全員来ている

しかし  
掃客は二刀も三刀も要らないので  
自分は厨戸は回されて

しかしこの時間帯は3時も過ぎており、殆どサイドメニューを頼む

人はいなかつたためとても暇だ

そろそろ終了時間だ、そんな時

三人が厨房にぞろぞろやつて來た

「あれ？ みんだしたの？」

「これから私が皆んなをコーヒーオー占いで占つてあげるの！ 真樹君もやつてあげるよ！」

という事でチノちゃんにリゼさん、

そして自分はコーヒーで占われる事となつた

「チノちゃんは…空からうさぎが降つてくる模様が浮かんで來たよ」

「？ そうは見えませんが、本当だつたら素敵ですね」

「リゼちゃんは…コインが沢山見える！ 金運がアップするのかな？」

「欲しかつた物が買えるかな…」

「真樹くんは…ジョウロが見えるね、

ガーデニングかな？」

「何だろう？ 明日何か仕事押し付けられるのか？」

「ティップシーは…セクシーな格好でみんなの視線を釘付けだよ」

「お前本当に見えてるのか？」

◆◆◆◆◆◆◆◆

「ティップピーも占いたいの？」

「どつちが当たるか勝負だね！」

フムフム…

「ココアの明日の運勢は…いつもよりスペイシーな一日、正直外出

しないのが吉じや

「だつてリゼちゃん、はははは」

「何笑つてんだ」

「いや、私じゃなくてお前の結果だろ」

◆◆◆◆◆◆◆◆

リゼさんもティップピーに占つてもらう

「リゼは将来は器量のある良き嫁になるじやろう」

「私が？ まさかー」

「昨日は夕食後にティラミス一つじや足りずキッチンに侵入した隠し

ても無駄じやぞ」

えつ、リゼさん昨日のあれつまみ食いに来てたんだ

「実は甘えたがり、褒めると調子に乗りおる、適当に流すのが無難」  
ティップシーにそのようにズバズバ言いたい放題にされてるリゼさん、

顔がだんだん真っ赤に染まっていき・・・

「この毛玉め!! ただの性格診断じやないか!」

ズバン!!!

そう叫びながらティップシーをチヨップした

「なんだ、リゼさん昨日つまみ食いしてたんだ」

自分はニヤニヤしながらリゼさんにそう言つた、それが自分の命取りだった

「うわあああああ

顔を真っ赤にしたリゼさんにみぞおちを突かれた

「ぐふう!!」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「せつかくだから、ティップシーに自分も占つてもらうよ」  
真樹もティップシーに占つてもらうようだ

「ふむ、どれどれ・・・!」これは

・・・真樹の運勢ははつきり言つて良くないの、解決出来ない問題  
があつても安易に人に頼らないのが良さそうじや」  
「なにそれ!」

◆◇◆◇◆◇◆ 翌日

高校

・・・今日はまだガーデニングとかそういうのを頼まれたりしない  
な・・・

あつ、あそこにいるはココアと千夜・・・あつ?あつ?!あ”つ!!!

「おい!! 千夜! 千夜!」

「あら、真樹君、どうしたの? そんなに声を出して」  
「ココアのこと!」

真樹は己のケツをバシバシ叩く

「え？ ココアちゃんのお尻がどうしたの・・・きやあ！」

そうココアのスカートがめくれておりパンツが見えてしまつてい

たのだ

「わしゃなんも見とらんぞ！」

「嘘！ 見たでしょ！」

あはあーん（泣

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ん？ そういうえばココア、昨日の占いでティッピーにセクシーな格好でみんなの視線を釘付けとか言つてたよな・・・

「なーんか嫌な予感がすんだよなあ」

売店で買ったサンドイッチを食いながら中庭を覗くと、ベンチに座りながら弁当を食つてる・・・その時

「あ”つ？」

上を飛んでいたカラスから何かがココア目掛けて落つこちて来た

糞か？！いや！あれはあんこ？！

なんであんこが降つて來たんだ・・・

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「なんだか今日はついてない気がする・・・」

「こんな日もあるわよ」

「気にすることたかないよ」

「真樹くんは知らないっ！」

「ほんとごめんつて」

「?!あつ!!」

突然頭の上からジョウロが落ちて來た、そのジョウロの水を被りココアはびしょ濡れになつてしまつた

「コ・・ココアちゃん・・・」

「・・・大丈夫・・・？」

するとココアは抱えていたあんこを出して

「あんこが濡れてなくてよかつたよー」

「ココアちゃん・・・！」

（なんてポジティブな奴・・・！）

◆◇◆◇◆◇◆◇

フルール・ド・ラパンに行くこととなつたココア御一行

「シャロちゃん來たよー」

「ななんてもの連れて來てるの!!やめてえ!こっち來ないでえ!!」

「?! 私そんな不幸オーラ出てたんだ」

多分怯えてるのはそのウサギつすわ

◇◆◇◆◇◆◇

休憩も終わり会計をすることにした

「490円のおつりです」

「シャロちゃんの手相も見よう」

そう言い、シャロの手相を占い始めた

「えーっと・・・あつ、

片思い中でしかも全く相手に通じない相がある・・・

「障害だらけの相ね」

「ご愁傷様です」

「あと金運がひどい・・・」

「みんな揃つて!それ以上言うな馬鹿ー!!」

そう叫びシャロは小銭をココアには投げつけ、ココアの額に命中した

◆◇◆◇◆◇

これまでのココアの出来事まとめ見てよう

チノちゃんのウサギが降る

←

ココアの弁当にあんこが降つて来た

リゼさんのコインが見える

←

ココアにシャロが投げた小銭が飛んで来た

自分のジョウロ云々は

←

ココアにジョウロとその水が降つて来た  
ティップーのセクシーな格好は

←

ココアのパンツが丸見えになつていた  
全ての占いの結果が悪い結果となつて全てココアの身に降りかかるので、ココアには他人の不幸の身代わりになる才能でもあるのだろうか？

「ココアよ、悪いことは言わないから今後占いはやめとけ、まじで」「ええつ！どうしたの急に！」

「自分からはこれ以上言えない、  
ではさらばだ！」

そう言いながら真樹はココア達と別れた

◆◆◆◆◆◆◆◆

——夜——

真樹は宿題をしていた

「あー、くつそ何もわからない・・・！ そうだ！リゼさんに教えて  
もらおう！」

◆◆◆◆◆リゼ部屋

「と言うわけで勉学を御指南して貰いたく来ました！」

「だからって何でこんな時間に来るんだ・・・まあ良いぞ」

「有難きかな！」

「よし、真樹！明日は早起きしろよ！」

「オーケー！朝から猛烈過酷塾！」

「いや、徹夜に耐えられる体力を付けるために走るんだ」

「ほへ？ いや、朝から勉強して夜は寝たほうが効率良くないですか  
？」

「なんだ？怖気ついたか？今更お前に拒否権はないぞ、朝直接私が叩  
き起こしてやる」

「ひいい！御無体な！」

こうしてリゼさんと試験勉強もとい

体力強化レッスンを受ける事となつた

疲勞困憊

自分の後ろから連邦どものモビルスース、ジムが接近してきたしかし所詮数ヶ月足らずで作つた急造品だ、対して自分が載つているのは我がジオン公国が何年にも渡り研究して作り上げた信頼ある量産機のザクである

「くたばれ！連邦のカス共！」

ジムに向かいマシンガンが火を噴く  
ジムはすぐさま盾を使い防御に入る

—スキを見せたな!! 馬鹿め!

マシンガンからヒートホリケへ持ち替え  
速力で体当たりをかます  
全體当たりの体系にし

その拍子にジムは盾を落とす

「この俺の技量を完璧つぶす前のミスだよ！ うつははははは！」

自分はコクピットの前で高らかに笑う・・・すると!

急にコンソール部分が真っ赤に染まり、敵の接近を知らせる

真の正面から見る、

正面から光がちらりと見えたと思うと、謎のモビルアーマーがみるみるうちに近づいてくる

「うわわわわわわわわ！？！」

目の前に紫色の!モビルアーマーが迫ってきていた、もう避けられない

そのまま避けられぬまま視界が紫色に染まる  
「ぎやああ!! 効かへへえ!!」

おい、起きろ！ 時間だぞ！」

リゼは未だ起きない真樹を揺り起こしていた  
「いやああ!!!」

すると突然真樹が叫びながら飛び起きた

「うおっ!? 急に飛び起きるな！危ないぞ」

「あつーああ、リゼさんか・・・おはよ・・・」

「おはよう、それじゃあ 早速朝食前に軽く走るぞ、着替えろ」

「いやだ、眠い」

そう言い布団へ潜り込んでしまった

「だめだ！約束しただろ！」

そう言いながら真樹を布団から引きずり落とした

◆◇◆◇◆◇◆◇

まだ夜明けもしてない時間に

朝ごはんの7時半まで走りこむこととなつた

「目標は山の上の展望台！いくぞ！」

「あらほらさつさ～」

空気は澄んでおり気持ちが良いことは良い、しかしこの季節は春とはいえない

「どうだ？ 真樹、気持ちが良いだろう？」

「正直言つて布団の中の方が断然気持ちが良いね！」

「なんだと！コイツ」

◆◇◆◇◆◇

「早朝の街つていつもと違つて新鮮に見えるよな」

「どの店も開いてないからな」

「空気が清々しくて気持ちいいな！」

静かなのも新鮮だし

「せつかくだから少しパンでも・・・

あれつ!? 真樹がいない！」

リゼは慌てて後ろを振り返ると

遙か向こうにゴミのように転がっている真樹がいた

◆◇◆◇◆◇◆◇

(あんなに速く走るなんて、おめえ本当に女かよ)

「さつきはどこめんな？ ゆつくり行こうか」

道は坂が多くなり始め、石畳であるから足の負担もダイレクトに来る

しかし、その坂を登りきった先は  
広々とした展望台であつた

この時間帯は人は殆ど居ない

登つて途中につるつ禿げの爺さんが一人降りて居ただけだ  
「ここからの眺めは綺麗だな」

「たしかに綺麗だけど、今度はもつとゆつくり来たい・・・」

「おっ！ 丁度日の出だ！」

「なかなかの景色だ」

「・・・よし、じゃあ降りるか！」

「もう少しゆつくりしようや!!」

◆◇◆◇◆◇

その後我々は帰宅し、朝ごはんを食べた、そのあと腹を休め 天々  
座邸の

中にあるトレーニング室で腹筋、腕立て伏せ バーベルにランニン  
グマシーンと昼まで鍛えた

◆◇◆◇◆◇

「よし！ 昼休憩の後は外に出て

バトミントンで体を動かすぞ！」

「おっし、バトミントンは割と得意なんだ」

「そうか！ なら全力で勝負だ！」

◆◇◆◇◆◇ 河原

「よし、いくぞ！ 嘰らえ！」

我が奥義 V1 報復ショットオオオオオ

!!!

真樹が放つた奥義V1報復ショットは  
まつすぐりゼに向かつて飛んで行く

「来たな！」  
パトリオットショットを喰らえー！」

「タアアアアアアアアアア!!」

撃ち返されたシャトルを真樹は打ち返えせず失点してしまう

「ふん！お前のサーブなんてお見通しだ！」

まさかこれだけだと思つてゐるのか!」

—何?!まだ技があるのか!—

そう叫び放たれたシャトルは大きな放物線を描きリゼの真上から

「私を見くびつてもらつては困るな！ 真樹！」

トオ!!

また打ち損じた

結局真樹はリゼに負けてしまった

「なんだ 得意と言つておきながら意外と弱いじやないか」  
「悔いは、次こそは負さんからな」

◆◆◆◆夕食後

リゼ部屋

「よし！後は徹底的に勉強するぞ！」

カリカリ

カリカリカリカリ

途中風呂を挟み

九  
九

カリカリカリカリカリカリカリカリ

ふと時計を見ると12時を回っていた

「リゼさん、そろそろここへお開きでいいんじゃない？」

「何を言つてるんだ、徹夜するために今日はいっぱい運動したんじゃ  
ないか、まだまだこれからだ！」

リゼさんはそんな事を言つてゐるが  
たくさん体を動かした為とても辛い

暫くもしない内に真樹は船を漕ぎ始め、ノートにはミミズの大群が  
出来上がりつつあつた

時刻は1時半を回つていた

「眠い……」

横でリゼさんが眠らないように声をかけていたが自分の意識はズ  
ブズブと眠りの中に落ちていつた

◇◆◇◆午前2時◆◇◆◇

「おい！おい、起きろ！……ダメだ完全に寝てしまつた……」

……こんな時間に使用人を起こすのも悪いし、だからといつて一  
人で真樹の部屋に連れていくのも大変だ、何よりちょっと廊下が怖い  
し……

……寝ている真樹の顔を見て見るがこれといつて綺麗な顔でもな  
く

「ぐぐぐ平凡な顔だ

「ま、まあ 真樹なら問題ないか……しかし恥ずかしいな……」

そう言いながら真樹を引きずるようにベッドへ乗せる

「……まあ、朝から飛ばし過ぎた感じもあるし 確かに疲れたかもな  
おやすみ」

そう言つてリゼもベッドへ入つた

## プールのスロープ、ガニ股歩きでゴツグ氣取り

リゼさんの体力強化レッスン後半戦

午前中は昨日と同じくマラソンを行つたが、リゼさんはバイトが入つていた為 途中で抜けてしまった

◆◆◆◆◆◆◆◆

午後になり鬼の居ぬ間に昼寝をしているとリゼさんからメールがきた、

『これから皆さんとプールに行くんだが、真樹もどうだ?』

『わかりました いくわ』

まじか、プールか

行くと決まれば準備だ、幸い水着はある

使用人に出かける事を告げ

家を飛び出した

◆◆◆◆◆◆◆◆

「ここがプールか

「お城みたいだね」

「古い建物を改造した名残だな、

じやあ私達は着替えてくるからな」

「オケ オケ」

◆◆◆◆◆◆◆◆

「一番乗りだ! イエイ!」

ささつと着替えプールへ出た

この時間帯はほぼ誰もおらず  
いるのはジジババくらいだ

温水プールだし、運動にちょうど良いのだろう

◆◆◆◆◆◆◆◆

チノちゃんはなぜか一人でチエスをやつていて、自分は一人で2.5Mプールでビート板に乗れるか試していた、人が少ないのでできる

特権である

すると

「今度は25Mプールで泳ごうよ」

ココアがやつて來た

「あ、泳ぐのはちょっと・・・」

「犬搔きで2M程なら・・・」

「私、深いプールで泳いだ事ないんだけど」

「意外！」

そういうとココアはプールへ入り

背泳ぎかどうか怪しい泳ぎを始めた

「私のクロール見てー」

「くろーるではない でなおしてまire」

◆◇◆◇◆◇◆

千夜とチノちゃんが賭けチエスを

やつている間、リゼさんの泳ぎのレッスンをすることとなつた

「では、これからリゼちゃんが泳げるようになに特訓を始めます」

「あ、待つて 泳ぐなら念の為に軽くストレッチをしたほうがいいと思ふの」

「さすがシャロちゃん」

さすシャロ

「準備運動は大切だよな」

リゼさんがそういうと脚を広げる

脚がほぼ180度に開いた

ひろみ○お兄さんかな？

これを見たココアが何故かライバル心を燃やす

「肉体美の表現なら負けてられないね」

そう言いシャロと自分の手を掴み組体操「扇子」の形になる

「え・・・何してる？」

これにはリゼさんも困惑の様だ

◆◇◆◇◆◇◆

「まずは息どめ勝負開始」

((何でそうなるんだろう))

「それじゃあ行くよ！ いつせーのっ！」

ドボンッ！

——30秒後

(そろそろ苦しい)

(まだ耐えられる・・・)

(ココアはどうだ？)

リゼがココアの方を見た  
するこココアは死んだ様に浮かんでいた  
(死つ?)

リゼは驚きのあまり吹き出してしまう

それに驚いて吹き出した真樹と息が続かなかつたシャロも顔を出  
してしまう

「私の勝ちだね！」

「変な体勢で息止めるなよ！」

◆◇◆◇2戦目◆◇◆◇

今度もまたココアが変な行動を始めた  
まず最初にウサギの耳を表す様なジエスチャー  
次に人差し指を上に向けるジエスチャー  
恐らくピストル？

そして今度は髪をかきあげる仕草をした

狩野英〇？

ザバツ！

「正解は全部リゼちゃんでした！」

「わかるか！」

「私はそんなんじやない！」

「勝負の趣旨変わつてる・・・」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

チノと千夜が良い勝負をしており

千夜が負けるとココアがチノをお姉ちゃんと呼ぶ事となり、ココア  
の姉の威厳が失われる為、たまらずプールから飛び出した  
そして真樹も気が付かないうちに

姿を消していた

「じゃあ先輩、とつとりあえずビート板を使つて練習しましょう」

「あ、ビート板じやなくて、

手を引つ張るやつ あれがやりたい」

（リゼ先輩意外と子供だ）

◆◇◆◇◆◇◆

「先輩つてスポーツ万能かと思つてました」

「泳ぐ機会なかつたからなー」

「年下に教わるつて何だか恥ずかしいな」

「今この状況は恥ずかしくないんだ」

「シャロが溺れても助けられるくらい上手くなつてやるぞー」

「そんな迷惑かけませ・・・」

ピキイ！

突然シャロがプールに姿を消した

「どうした！もう想定訓練か！」

（緊張して足をつった・・）

「おう、シャロどうした大丈夫か？」

「なによ、あんたどこ行つてたのよ・・・」

「あそこに飛び込み用のプールがあつたんだ、それがクツソ深えんだ」

「あつそう・・・」

◆◇◆◇◆◇◆

シャロの教えによりリゼは完全に泳げる様になつていた

「リゼちゃんすごーい！」

「もうあんなに泳げる様になつてる！」

「シャロの特訓のお陰だな」

「リゼ先輩は飲み込みが早いですから、私はほとんど何もしてないです」

「リゼ！お前はもうどの様な戦場に出ても問題ない！ここまで成長して俺は誇りに思う！」

「あんたは本当に何もしてないでしょ!!」

「泳ぐのがこんなに楽しいとは思わなかつた、ありがとなシャロ」「今度は最も深いところに行こうな！」

リゼはシャロの手を掴むと

さつき真樹が飛び込んでいた様なプールへ向かつた

「それは私でも無理です先輩！」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

気づけばもう夜だ

「ここから見える夜景きれいー！」

テラスからココアが夜景を眺めていた

「売店へ行つて来ました」

「みんなで飲みましょう」

「コーヒー牛乳でカンパニー！」

温水プールでこの季節の時間帯で

牛乳はちょっと冷えるがうまい

「そういうえばチエスの対決つてどつち勝つたの？」

千夜に聞いてみるが

「フフ、すぐ分かるわよ♪」

と言つた答えてくれない

「お姉ちゃん！牛乳はこうやつて飲むんだよ！」

「チノが勝つたのか」

どうやらチノが勝つたようだ

その日はみんな帰る頃には疲れてぐつたりしていた為、その日の勉強は無しとなつた

真樹が内心ガツツポーズしたのは内緒である

楽しみを取る者、極刑也 ★挿絵有り

——玩具屋——

「ラツキーヾ リアルタイプゲルグ○じやん！」

自分はウキウキしながらレジへプラモを持っていく  
するとそこへココアがラビットハウスの制服でやって來た

(何事!?)

その様子を見るとココアが躊躇なく8000ピースのパズルを手に取つてレジへ並んだ、会計を済ますと

またすぐに店から飛び出た

「おっ?!おおい！ココア！」

どうしたんだ・・・

◆◇◆◇◆◇◆◇

あのココアの慌てつぶりに不安を感じ、そのままラビットハウスまで来てしまつた、

今のは喫茶店からバーになる  
準備の時間だ

「ごめんください」

「すみません、今は準備中なので・・・あつ、真樹さん」

「チノちゃん、ココアがなんか慌てて見てたみたいだけどどうしたん?

「実は・・・」

——少女説明中——

「成る程、チノちゃんのジグソーを

ココアが勝手に作つたから、償いに新しいジグソーを買つたけど8000ピースのやつで大変だと

「はい」

「それで手伝つて欲しいと」

「はい、そういう事です、お願ひします」

◆◇◆◇◆◇◆

と言うわけで千夜とシャロも徵収されジグソーパズルを組むこと

となつた

リゼさんは一言も発せず黙々とパズルを組み立てている

「ジグソーパズルなんて久し振り」

「端っこから作つてくのが楽なんだよね」

「チノちゃんと作つた所と合体」

どうやら千夜だけ1ピースも合わせられず落ち込んでいるようだが無視を決め込む

――時間後――

みんなグッタリしており、

集中力が切れていた

「ハートマークが出来たぞ！」

リゼに至つては疲れすぎて逆に何でも面白く感じる様な感じになつてゐる

「所で完成したらどうするのコレ？」

「喫茶店に飾るのも良いかもね」

「いや、下に何も敷いてないのに

どうやつて額に入れるのかなーって」

急に全員無口となる

「何も考えてなかつたんかい……」

「私……気付いてたのに

この空気になるのが怖くて言えなかつた……、もつと早く行つ

てれば……私のせい……つて

「余計重くなるから自分を責めるのやめて!? どうにかなるよ!」

◆◇◆◇◆◇◆◇

それから30分後

ジグソーパズルが完成した

「それではオペを開始します

両手をあげる医者がよくやるあのポーズをしながらその様子を見

守る

面々に告げる

「先生 助かりますよね……」

千夜も演技に乗つかつてこんなことを言う

「大丈夫です、この「しゅじゅつする造」めにお任せを」

「胡散臭100パーセントなんだが・・・」

「私、失敗しないので」

「本当かよ・・・」

すみを少しだけ上げ、そこから下敷きを入れて額へと移す作戦だ

周りは緊張した面持ちで眺める

すると・・・

「あっ、いけね！」

下敷きを一部分に入れすぎて  
その一部分だけ分割されてしまつた  
図←

76

「あつー！何やつてんのよ！」

「何をやつてるんだ！」

シャロトリゼさんから苦言があがる

「大丈夫！大丈夫！まだ打つ手はあるから！」

結局ピースは四つに分けて

それぞれ額に入れてから再度調節するというめんどくさい手間をかけて無事完成した



「オペ終了しました」

「先生！ジグソーパズルはどうなりましたか?!」

「手術は成功しました、今夜がヤマでしょう」

「失敗してるじゃないか！」

◆◆◆◆◆◆◆◆

「お腹も空いたしみんなの分のホットケーキ作つてくるよ！」

「！、私も手伝います！」

ココアとチノはキッチンへと向かつた  
「あの二人自然に仲直りしたみたいだな」

「喧嘩してたんですか？！」

「だつていつも以上にチノの口数少なかつただろ？」

千夜とシャロは少し間を置いて

「いつもあんな感じじやないの？」

とハモつて答えた

(こいつらが鈍感なのか私が勘ぐりすぎなのかわからなくなつてくる……)

◆◆◆◆◆◆◆◆

その後ココアがチノちゃんが口を聞いてくれないと愚痴りに來たり

チノちゃんがココアが死んでいると報告に來たりしたが、無事ホツ

トケーキは完成した、

ホットケーキを平らげ

部屋の雰囲気は和やかな談笑ムードとなつていた

「しかし最初やつてたパズルのピースはどこに行つたんだ？」

「こういう時つて忘れた時に見つかりますよね」

「あと思つたよりも近く足元とかに

落ちたりするんだよね、コードの隙間にキヤスター棚の下……」

「そう言えばシャロちゃんは学校にランドセルを忘れたまま帰つてきたことがあつたわ」

突然のカミングアウト

「リツ！リゼ先輩の前で昔の話はやめてよ！」

シャロが恥ずかしそうにベットを叩いた  
するとベットの上にいたティッピーの下から件のピースが出てきたのだ！

「あつ?!ピース！色がベットと同化してて見えなかつたんだ！」

◆◇◆◇◆◇◆◇

「これつて知恵の輪？懷かしー」

ココアが机に置いてあつた知恵の輪を手に取る

「昔おじいちゃんが作つてくれたんです」

「チノつてパズルゲーム好きなんだな」

「難しくて何度も挑戦しても解けなかつたんですが・・・いつか自分の手で解いておじいちゃんをあつと言わせてみせます！」

「知恵の輪つてさ、あまりに解けないから金切りノコギリで切つた方が良いんじやないかつて思う時あんだよね」

「なんであんたはそういうつも発想が野蛮なのよ・・・」

カチヤカチヤ

「あつ」

ココアの野郎！

この流れで知恵の輪を解きやがつた！

その後部屋が気まずい雰囲気になつたのは言うまでもない・・・

## デジカメコンバットは街のウサギさんを攻める

ある日の事、ココアと千夜が学校帰りで話していた、内容はチノちゃんの笑顔を見たか否か

「そう言えば、最初に会った時より

表情豊かになつたかもね、この前あんこに追いかけられているシャロちゃんを見て羨ましそうに笑つてたわ」

「…………一緒に暮らしてゐるのに笑顔を見たことないなんて……」「きっと偶然見逃してただけよ」

「それが表情の微妙な変化を感じ取れないだけよ」

「私そんな鈍感じやないよ！」

◆◇◆◇◆◇◆◇

「写真撮つてるの？」

「うん、家族に手紙と一緒に送つてあげるんだ」

「千夜ちゃんも撮るよー」

「やあお二人方何してるの？」

「あら、真樹君」

「いまね、家族に送る写真を撮つてたんだよ」

「そうなの？ ジヤあここはひとつ自分もかつこよく撮つておくれよ！」

そういうと柵に寄りかかるようにしてポーズをキメる  
カシヤ！

「はい！ バツチリ撮れたよ！」

「ちよつとどんな風に撮れたか

見せておくれ

「はい」

「おお、バツチリ撮れてる」

「ココアちゃん、さつきの写真現像できたら見せてもらえる？」

「千夜ちゃんの写真なら・・これだよ！」

「いえ、写真が出来たら未来の大手チェーン甘兎の店主としてサインを入れたいの」

「すげえ壮大な夢！」

◆◆◆◆◆◆◆ラビットハウス

ココアと真樹がカメラを構えている

「成る程、お前もココアと同じく実家に写真と手紙を送ろうと」

「そゆこと、と言うわけでまずリゼさんの働いてるところを撮ります」

真樹は首からかけた古い一眼レフを構えてガシャリとフィルムを送る

「わかつた・とつ撮つたら見せろよ、半日だつたら恥ずかしいからな」「わかつた！」

（これフィルムなんだよな・・・）

カシヤ

ガシャリ

ココアとチノちゃんはデジカメで確認をする

「！」

「！　これは心靈写真!?？」

リゼさんの写真の右上に白い何かが写っていた

「今までその銃で何人の人をやつてきたの!?」

「おい、それは指だろ」

◆◆◆◆◆◆◆

ラビットハウスの三人がそんなやりとりをしている間、真樹はカメラを持って外へ出た

——フルール・ド・ラパン——

「お客様、店員の撮影はやめてください」

「バニーガールなんて滅多に見ないから面白いかなって・・・」

「うちはそう言うお店じゃないんだけど?!って言うか真樹はラビットハウスの制服だけど店は大丈夫なの?」

「今ラビットハウスには自分含めて四人もいるんだ、一人減つたくらいなんてことないでしょ」

——甘鬼庵——

「あら、真樹君も写真を撮りにきたの？」

「折角だから決めポーズでも撮つてくれ」

千夜はあんこの座つてるテーブルに

肘をつきキメ顔をキメる

「良いね！これは巷で言うインスタ映えだ！」

「現像が終わつたら見せて頂戴♪」

「了解！」

——ハーツ・ベーカリー——

・この前の話で出て来た鳥海の働くパン屋である

「いらっしゃい、どうしたのそのカメラ」

「実家に写真を送るんだ、写真を撮つていいかい？」

「いいよ、かつこよく撮つてくれよ」

ガシャリ

「うん！多分綺麗に撮れた！」

現像したら一枚やるよ

「楽しみに待つてるよ」

「おう、そんじやあな」

◆◇◆◇◆◇◆

その後ラビットハウスに戻ってきた真樹は、出掛けてる間の顛末をリゼに聞かされ、その中のココアと千夜の漫才の内容を聞き、調理実習の時別の班だったが何か言い様のない恐怖にかられたと言う

## 練習 ★挿絵有り

### 球技大会

それに限らず学校における運動系の大会は運動音痴にとつて地獄のイベントである

「球技大会・・・憂鬱だ・・・」

「真樹君も？・・・私も自信が無いわ・・・」

「三人共！それなら大会までの間練習しようよ！」

「そうだね、うだうだ言つても仕方ない・・・」

（どうせならリゼさんに特訓してもらつたら・・・いや、やつぱりやめよう）

前回の強化特訓を思い出したのであつた

◆◇◆◇◆◇

「もうすぐ私達の学校で、球技大会があるんだよ」

「そう、ココアと千夜とで練習するからその間バイト出れなくなつちやうけどいいかい？」

「いいですよ、二人共頑張つてください」

「良かつた、ありがとう」

取り敢えず話がついて安心していたらココアが何かうずうずしてた

「ほ、本当に？ 止めないの？」

「ああ、別に忙しい訳じやないし」

「そつか・・・」

（止めて欲しかつたのか・・・？）

◆◇◆◇翌日◆◇◆

「それでは今から練習を始める！

目指せクラス1位！」

「おおーー!!」

三人共学校のジャージに着替えてやる気満々である

◆◇◆30分後◆◇◆

「一旦休憩しよう」

「・・・賛成」

千夜がもう既にヘトヘトになつてゐる

「自分はちょっと飲み物買つてくるけど、なんか欲しい飲み物ある?」

「私は緑茶で・・・」

「じゃあ私はスポーツドリンクをお願い!」

「OK!」

財布を握りしめて自動販売機に向かつた

◆◇◆◇◆◇◆

自販機で飲み物を買い、ココアと千夜の元へ向かつていると、リゼとチノがバトミントンのラケットをもつて歩いていた

「あら? お一人とも喫茶店はどうしたのさ?」

「おお、真樹か、おじさんが早めに仕事を代わつてくれたんだ」

「私たちはこれから公園でバトミントンの練習をするんですけど」

「そりゃあバトミントンは得意だぞ」

「そうかあ? この前私にぼろ負けしてたじゃないか」

「フフフフ、実はまた新たな技を考えたのだよ、次こそは負けんぞ」

◆◇◆◇◆

「もうそろそろで公園・・・あれ?」

「あれは・・・ココアさん?」

「最近死んだフリが流行つてるのか?」

「隣には千夜さんが」

「何があつた?!」

千夜とココアは一人して希望の花を咲かせていた  
「まるで殺人現場だな」

「この状況どう見ますか?」

天々座刑事と香風刑事の捜査が始まつた

「現場に残つていたのはこのボールの様な物だけです」

鑑識となつた真樹が落ちたボールを拾い上げる

「成る程、現場に残されたのは一つのボール、球技大会の練習というの  
は建前で、お互いを叩きあうのめしあつたというわけか……」

するとココアがガバッと起き上がつた

「どうしたらそう見えるの!?」

「生きとつたんか ワレエ!!」

◆◇◆◇◆◇◆◇

「どうしてこんな事になつたん?」

「真樹君が飲み物を買いに行つてゐ間に少しだけココアちゃんと練習  
してたの……」

○○○○

（「もう無理……私当日休むから……」）

（「努力あるのみだよ！ 今度はトスで返してね」）

（（とす？鳥栖？t o s u？）「トスつて何?!」）

千夜はボールをアタックで返し

そのボールがココアの頭にクリーンヒットし、倒れた  
そして千夜も体力の限界で倒れてしまつた

○○○○

どうやら千夜は和菓子作りと追い詰められた時だけ力を発揮する  
らしい・・・

◆◇◆◇◆◇◆◇

「これじゃチームプレイも難しいな

「顔に当たたら反則なんだよ」

「うそ・・・知らずにやつてたわ」

「え?! わざとじやないよね?!」

「たしか顔面はセーフじやなかつたですか？」

「そうなの？良かつたー」

「いや！全然良くねえ！」

◆◇◆◇◆◇

「せめて関係ない人に当たちやう癖は直さないと……」

「今度はレシーブで返してね」

そう言いココアがボールを投げるが  
「やばつ！ ちよつと強すぎちゃつた！」

リゼとバトミントンをやつていたチノの方も手が滑りラケットが  
千夜の方に飛んで行つてしまふ

「あ、 鞄紐が」

千夜はさつとかがみ難を逃れた

しかしココアのボールが真樹に当たつてしまふ  
「ああつーー!! あつ！ あつーー！」

「真樹君！ 大丈夫??！」

ココアが慌てて真樹に駆け寄つてくる

「大丈夫 眼鏡は壊れてない」

「眼鏡より自分の心配をしろよ・・」

◇◆◇◆◇◆◇

「千夜ーおばあさんが帰りが遅いって心配してたわよ」

「シャロちゃん」

「シャロもちよつとやつてくる？」

「リゼ先輩も練習してたんですか?!」

「その格好なら動きやすいし大丈夫だよ！」

「それに犠牲者は多い方がね・・・」ボソツ

「真樹 あんたなんて言つたのよ？」

「別に」

◇◆◇◆◇◆◇

バレー対決

ココアチーム（ココア、シャロ）

V S

千夜チーム（千夜、リゼ）

審判 チノ

応援 真樹

「シャロちゃん今こそあの状態になるべきだよ！」

「でも、そんな事恥ずかしい・・・」

「ちょっと待つてて！」

○○○○○○○○

「イエーイ！バリイボオルだいしゅうきいーーー！！」

「おおつーーと！シャロ選手

いきなりドーピングだあー！！」

○○○○○○

そんなこんなで遂に球技大会当日

「男子バレーはどうだつた？」

「ダメだね ボロ負けだつたよ」

「そいや千夜はどこに？次でしょ女子バレーは」

「うん、千夜ちゃんはドッジボールに交代してもらつたんだ」

○○○○○

「すゞい、全ての球を避けてる

もしや彼奴はニユータイプか！」

因みに女子バレーはなんとか3位のうちに入れたと言う

## 減らない、体重

「リゼ、どうした？もう食べないのか？」

「あ、ああ・・親父 今日はもう良いや」

「そうか」

リゼが自室へ戻った後

天々座さんが自分に話しかけてきた

「真樹君、最近リゼがあまり食べないのだがリゼに何かあつたのか？」

「いえ・・・そう言われましても

特にラビットハウスでもそれと言つた問題はありませんし・・・」

「・・・真樹君、君はリゼと一番歳が近い、リゼが何か悩んでいたら力になつてくれ」

「・・わかりました・・」

◆◆◆◆◆◆◆◆

(そう言われてもなあ あんな鉄砲大好き女の考へてる事なんてわかるかい、こんちくしようめ、メクラボンクラ扁平足のどさんぴんが) 思い付く限りの罵倒を考へてるうちにリゼ部屋の前に着いた

コンコンコン

「へい、リゼさん ちよつといい？」

「むつ？真樹か？ いいぞちよつと待つてろ」

—リゼ部屋—

「なんだ？話つてのは」

「・・その、なんだ、あれだ

リゼさん なんか悩みもある？」

「・・・?! いや！ 特にないぞ

そうだ！ 憶みなんか 無い！」

「嘘だ！絶対なんかあるべ！」

「うるさい！無いものはないんだ！」

黙らなきやこうだ！」

リゼさんがプロレス技をかけて来た

「痛い痛い痛い痛い痛い！」アア―――!! れる

翌日学校！

立田標

「成る程チノちゃんとりゼさんがココアのパンを拒んでいると」「こんなに美味しいのに変ね」

真樹と千夜は二二二ノガ持ててきたノンを食へながら語を聞いてい

「はい、そのマシン練り込みを、なまこ、つて

「！　味のマンネリなら新しい境地を開発するべきよ！」

「でもどうすれば・・・」

一豆板醤パンは？シヤロちゃんがダイエットに豆板醤団子をよく食べ

たもの

（ミソジの二の頃の悪ハナ

「もしかしてダイエツトしてるんじや!」

「チノちゃんは太るの気にする年でもないけど

七

あの二回ボーリング三回を保てるのは

難しいと思うよ！きつと裏で努力を・・・」

と思ふ二二二アであつたが目の前の千夜もリセと負けで笑ひ立つの

重刊兼

間食

○しかし一部ふくよか

というスタイルであつたため

「努力しなくてもスタイルを保つ秘訣ってなんですかッ！」

答えになつてなかつた

「というわけで同じ年頃の妹を持つ鳥海殿に進言お頼み申す」

「ふうん 成る程ね もしかしたらさ

チノちゃん 体重を気にしてるんじゃない?」

「まさかあ！13歳よチノちゃん」

「いやいや結構そのくらいの子は成長期で体重が増えるのを気にするんだつてさ」

「えへ ・・・あつ！ そうか

そんな話こ○亀で見た事ある〜！」

○ち亀万能論

「うちのマヤはそんなに気にせず  
バクバク食つてるようだけどね」

◆◇◆◇◆

天々座邸

リゼ部屋

「ふーん リゼさんは歯医者に行くのがそんなに怖かつたなんて  
ねえ」

「わ、私は歯医者の削る音がどうしてもダメなんだ・・・」

「えーでもそれが怖いのってせいぜい小学生中学年までじゃね？虫歯  
をほつたらかすと死にますぜ」

「わかってる、わかってるんだ・・・わかってるんだヨオ〜!!!  
勢いでまたプロレス技をかけて来た

「痛い痛い痛い痛い!!折れる折れる腕の骨が折れる！」

木組みの家と石畳の街に真樹の絶叫が響き渡った

## マサキの作りしもの

「パトリオットサーブ！」ブン！

「パトリオットサーブ！」ブン！

ある日リゼさんが庭でバトミントンの素振りをしていた。

「おうまた練習か？ 精が出るね」

「真樹！お前もどうだ？」

「いや自分は遠慮しどきますわ」

「そうか！」

「パトリオットサーブ!! うおあ!!」

「あつ」

リゼさんの持つてたラケットが勢いで手からすり抜けた  
そしてそのまま天々座さんの部屋に・・・

ガシャーーン！ ゴロゴロ・・・ガチャーン!!!

「ああっ！やらかした!!」  
「しまった！」

割れた窓を覗くと

「あちゃー！ 酒が！リゼさん！なんか酒が割れてるよ！」

「なんてこつた・・親父のワインを割つてしまつた・・・」

その後天々座さんには

「怪我が無くて良かつた、ワインについては気にしなくて良い」と言われたが、リゼさんは余程気にしていた様だった・・・

◇◆◇◆◇◆

「なあ真樹、お前は父の日はどうするんだ？」

「自分は・・・そうだね、いつもお世話になつてゐるし感謝の印に戦車の  
プラモデルでも作つてプレゼントするかね」

「そうか、私はあのワインを送ることにするよ」

「・・・あのワイン、高くない？」

「ああ、だから短期だが別の店でもバイトをする事にする！」

◆◇◆◇◆◇◆

「と、言うわけで来ました」

「真樹くん いらつしやーい」

「リゼさん、どうだい甘兎庵は？」

「順調だ、問題ない」

「そいつは良かつた、じゃあ何を頼もう・・・」

お品書きを見るが・・・

「しかし、これはいつ見ても個性的なメニュー名だな・しかもなんか新メニューとかもあるし」

壁に貼つてある（ジレンマ構成型あんみつ）や（つぶあんとねりあんの非対称性）なんてのもあった

「・・・こしあん派独立戦争・・なんてのはどうだろうか・・」

「・・・!! それ！いいわね！」

「！ そう?!嬉しみ！ そんじやあ

みたらしの乱、最中の政変、金鍔事変 なんてのは!」

「凄いわ真樹君！ アイデアがいっぱいよ！」

「おーい、注文はいいのか？」

「えつ、あつじやあ 取り敢えずトワイライトオーシャンをお願いします」

◆◇◆◇◆◇◆

「リゼちゃんが来てるから、ミリタリー月間にしようと思うの」「しなくていい」

「真樹君はどう思う？」

「どうせならモデルガンでも飾ろうや」

「成る程！ミリタリーは男の子の方が詳しいから参考になるわあ！」

「それと抹茶の迷彩ラテアートを作つてみたの！」

「悪くないが気持ち悪い！」

「ケーキなんかにあんことチョコクリーム、抹茶クリームを使えば戦車の迷彩っぽくなるんじやね!?」

(ソミュア s35 の迷彩みたいなの)

「うわあー!! ボケが一人もいて手に負えないーー!!」

◆◇◆◇◆

どうやらリゼさんはフルール・ド・ラパンでも働き始めたそุดから見に行くことにした

「いらっしゃいま、っ！ 真樹！」

リゼさんがラパンの制服を着てラパン式の挨拶をしていた

「・・・ヒエ・・・」

「なんだその反応は！」

いや、いつもそんな服着ないやつがあんな感じに接客してくると逆に怖くならない？

◆◇◆数週間後◆◇◆

ワイン店

リゼさんとシャロと自分でワインを見に来たが、そのお目当のワインがべらぼうに高かつた

「お金が足りない！」

「14万8000?!

はあ〜！たつか！」

「予想以上だ・・・」

「それなら・・・ワイングラスはどうですか？ こんなに頑張ったんですけどからどんな物でも喜んでくれますよ、しかしこのグラスの透明感たまりませんよね！ ハアハア」

「器なら何でも興奮するのか」

「今ならセットがお得みたいですね」

「親父とペアグラスだと?!

「流石にキツイだろ！」

「両親用とか考えないんですか？」

そんな中、真樹がワイングラスを手のひらに包む様に持ち、ワインを混ぜるような動きをしながら

「逢いたかつたよヤマトの諸君」

と某顔色の悪い總統の真似をした

「そんな持ち方をするとワインが温まって香りが逃げるから NGな  
のよ?」

「・・・なんと!」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

コンコン

「天々座さん、よろしいですか?」

「おお真樹君か、どうした?」

「今日は父の日ですし、日頃お世話になつてているという事で・・・これ  
を・・・」

そういうと、手に持つてた包装された箱を渡した

「開けていいかい?」

「どうぞ どうぞ」

「おお、パンター戦車かよく出来てるじゃないか、作ってくれたのかい  
?」

「はい、それは自分が作つたんです、どうですかね・・?」  
「いいじやないか、とても嬉しいよ

「ありがとう」

真樹のプレゼントを受け取つた

天々座さんの顔はとても嬉しそうな顔をしていた

## おう、青山仕事しろや

「やれくそ 良い天気だなあ」

土曜日だというのに自主的に7時に起きた真樹はカーテンを開けるなり、こう呟いた

「こんな日は日当たりの良くて換気の良い部屋でバトルシップを完成させるのにピッタリだ」

朝飯を食べ終わった後自室で作業の準備をしていた所・・・

「おい！ 真樹！ 休日だからといって

自室でダラダラ過ごすな！」

「わあ⁈ ビックリした！ 休みの日は部屋でのんびりしたい！ あと少しで作りかけのバトルシップが完成するんだ！」

◆◆◆◆◆◆

真樹は駄々をこねるも、リゼさんの気迫におされ、しぶしぶリゼさんと一緒に外に出ることとなつた

「んじゃあ自分はこっちの方を適当にブラブラしてるから」

真樹はそう言い、リゼさんは別行動をする事にした

◆◆◆◆◆◆

今日はとても天気が良く散歩にはもつてこいな日だ

大通りにあるいくつかのベンチの一つに腰を下ろしボケ～つとしていた

「ここにちは～いいお天気ですね～隣宜しいでしようか？」

「えつ、ああいいですよ」

突如知らない女性が話しかけ、隣に座つた

「こんな日にはとても良いアイデアが浮かんできそうです」

「何か作つてるんですか？」

「私、小説を書いているんです」

「へえ、どんなペンネームなんですか？」

「青山ブルーマウンテン ・・・といいます」

(寺門ジモンかな?)

「実は最近小説が映画化しました」

「すごいですね、なんて本なんですか?」

「『うさぎになつたバリ스타』という小説です・・・」

「へえー たしたニュースとかで紹介されていましたね  
(・・・つつても殆ど知らない様なもんだけね・・・)

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「あれ? 真樹くん?」

「お、ココアにチノちゃん」

「真樹さんもお散歩ですか?」

「まあそんな所かね」

そんな何気ない話をしていると

「・・・リゼさん?」

「はい!」

チノがすれ違つた1人の少女に声を掛けた

「・・・と思つたら違つたみたいです、失礼しました」

「さつき見かけた時と服と髪型が違うもんね」

「ん? でもリゼちゃんって呼んだら振り向いたよ?」

「違います、私は口ゼです聞き間違えただけです」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

(・・・カットモデル頼まれたのはまだしも、買った服をすぐ着たくなつてしまつたなんて・・・)

「えー、あの 口ゼさん? でしたか、ちよつといいつすかね?」

「はい、なんでしょう?」

リゼ(口ゼ)が振り向くとそこには真樹がいた

「あなたはさつき一緒に居た・・・」

「え、いやそうでしたつけかな、ハハハ・・・えー、その、あれです

自分越して来たばかりなので、

あれです・・・ この街の案内でもしてもらえませんかね?」

「え、」

(ええーーー  
!!!!??!

まさか相手がリゼとは思うまい

(やばい、コレはやばいぞ！)

リセは老えていた

（まさか真樹がナンパして来るなんて！、急な事だつたから返事しちやつたけど、取り敢えず知り合いにバレない様にしないと…）  
「じ、自分はまだここに来て数ヶ月ぐらいなんですが、いい街ですよねえ」

そ、  
そ、うなんですか、  
そ、うだ！

ちよ」と疲れるんですか  
山の上に良いところがあるんですよ】

「アーティスト」

「綺麗な眺めでしよう?」

いやあ綺麗な眺めですね

そういうのは此處は前にも知り合いと来た事があるんですよ」

「ハジ、セバのサヌキシヅサジ一男タニハシヌツジミ、北逃

朝の走り込みに付き合わされた時なんだ、自分はメチャクチャ眠かつたのにさ」

「まあ、それは飛んだ災難でしたわね・・・」

A vertical column of eight diamond shapes, alternating between black and white.

クレーブの仕事を終えたシャロは、荷車に積まれた荷物を山奥まで運ぶアルバイトをしていた。

(荷物の中身は知られてない)

—ふう結構疲れるわね、此処で一回休みましょ」

すると・・・

「・・・この声は・・・?」

リゼしえんぱい!? まざい! こんな姿見られたら! アワワ!!

急いで茂みに隠れる

向こうからリゼ（ロゼ）と真樹がやつて来る

（リゼ先輩！ 可愛い服着てる！

隣にいるのは・・・?

真樹!?

どどどどうして 真樹カリゼ先輩と?! なんで!?

シャロは混乱しながら2人を見ていた

◇◆◇夕方◆◇◆

「こんな時間までつきあつてもらつて、本当に申し訳ないです」

「いえ、大丈夫です ではそれじゃ!（こんなにも時間を食つてしまつた・・・）

スタコラヽ

「あ、 行つちやつた ・・・ ・・ また会えるかな・・・」

その場で真樹は立ち尽くしていた

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

その夜、真樹は帰つてからは元気は無く、夜ご飯はお茶碗一杯しか食べず、夕食後も窓から星空を眺め溜息をついていた、そう真樹はロゼを好きになつてしまつたのである

その様子をリゼはドアから覗き見ていた

「・・・ 真樹の奴・・・ あの格好がそんなに良かつたのか・・・  
でも・・・ ロゼは私なんだ・・・ 複雑だな、この気持ちは・・・」

リゼはリゼ自身にもよく説明出来ないような複雑な気持ちになつていた・・・

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

そんな中、理由を知らないシャロは真樹とリゼが一緒にいた事にショックを受け、コーヒーを自棄飲みしていたのであつた・・・

## 開幕、ラビットホース春のパン祭り！

「…おじいちゃん、私コーヒーの匂い大好きです、緑茶とハーブの匂いも

素敵です

：：でも最近安心する匂いが増えたみたいですが、だけど硝煙と溶剤の匂いは苦手です…」



歌いながら真樹はラビットハウスへ向かう。

「こんちはー」

真樹が店内へ入ると、聞き慣れない声で挨拶をされた。

「あ、いらっしゃいませー」

「あれ？」

其処には見知らぬ女の子がいた。

(店間違えたかな?)

するとカウンターには、もう一人知らない子がいた。

「チノー このモコモコしたの可愛いなつ！、倒したら経験値上がりそう！」

(よく見たら一人の制服着てるし…)

「マヤさん、ティッピーを返してください」

奥からチノちゃんも出て来る。

「こんちは、チノちゃん」

「あ、真樹さん」

「この子らは誰だい？」

「二人は私のクラスメートです」

「マヤだよ！」

「メグです！」

そんな二人の自己紹介が行われていると  
「…誰?!もしかしてリゼちゃん!…こんなにちつちやくなつて…」

ココアがやつて来てマヤに駆け寄る。  
どうやらリゼさんの制服を着ていたのでよく分からぬ勘違いをしたようだ。

◆◆◆◆◆◆◆◆

「えっと、ココアさん・・・」

「私の事はお姉ちゃんって呼んでね」

「気にしなくていいので・・・」

「チノちゃん羨ましいなー、こんな優しそうなお姉さんと一緒に暮らして」

「お料理も上手い・・・！どうしてこんな素敵なお姉さんと一绪に暮らなかつたの?!」

「ココアさんはパンしかまともに作れないんですよ?!」

◆◆◆◆◆◆◆◆

「すまない！部活の助つ人に駆り出されて・・・！」

「そう叫びながらリゼがやつてきた。

するとココアがマヤとメグを抱き寄せ、

「私の新しい妹です♪」

「状況がよくわからないが、よくわからない嘘をつくな」

◆◆◆◆◆◆◆◆

「おおー、戦車だ！」

マヤはカウンターの隅に置いてあるプラモモデルに興味を示した。

「それはね、マサキくんが作ってきたんだよ！」

「へエー！凄いじやん！」

「カツコいい戦車だよね！」

そう言いながら「マルダー2」を見ながら話していた。

それを見ていた真樹は・・・

(それは戦車では無い!!それは自走砲でだな!)

何か言つてやろうとウズウズしていたが、そこにリゼがやってきて肩に手を置いた。

「真樹、普通の人には戦車と自走砲の違いなんて分からぬいぞ」

「ぐうう」

◇◆◇◆◇

「ねえ！パン祭りをしようよ！」

ココアの提案により、今度の土曜日にラビットハウスでパン祭りを行うこととなつた。

「と言うわけで、これからチラシを作るよ！」

現在ココアはやたらと張り切つてチラシを描いている。  
因みにリゼさんはチラシ配り担当、  
自分はチラシの印刷担当だ。

しばらくした後・・・

「真樹くん！チラシ出来たよ！ 印刷お願い！」

「ギヨイギヨイー（御意）」

そういうと真樹はココアからチラシを取ると、プリンターへ向かつた。

「どれ、どんな感じ？」

真樹はチラシを眺める。

「うえるかむかもーんだつて w」

とだけ言つて鼻で笑いながらプリンターにかける。

(うおオン 僕はまるで人間印刷所だ)

ラビットホースと書かれたチラシはどんどん刷り上がりしていく。

「よし、出来た」

それをリゼさんが配る籠に入れる。

「それじゃあ、配りに行つてくる」

そう言つてリゼさんは出かけた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

その後はココア、チノと一緒に、仕事とパン祭りの仕込みを行なつていたのだが、突然余つたチラシを見ていたチノが

何かに気付いた。

「ココアさん、ラビットハウスのスペル間違つてます、これハウス（家）じゃなくてホース（馬）です。」

「やつちやつた！」

「真樹さんもしつかり確認してください。」

「すんません・・・」

「あつ！ 看板に馬を付けたら解決！」

「しませんよ」

「こうしちゃいられん！ 早く回収しにいくぞ！」

「急がないと私のうつかりが知れ渡る！」

店をタカヒロさんに任せ、三人はチラシ回収の為に外に飛び出した。

◇◆◇◆◇◆◇◆

その後リゼの元に行き、何とか回収できたと思つた矢先に強風でチラシが飛ばされ、回収作業に奔走する事となる。

◆◇◆◇◆◇◆

翌日・・・

パン祭りは無事成功した、自分が作つたドムパンのジエットストリームアタック  
セットも無事売れてよかつた。

「千夜ちゃん、今日はパン祭りに来てくれてありがとね」「無事に成功して良かつたわね」

我々は千夜を家まで送つたついでに、来れなかつたシャロにお裾分けする為にパンを持っていた。

「なあ千夜、シャロの家知らないか？」  
「今日来れなかつたからお裾分けしたいんだよ」  
(マサキの紙袋には目玉として作ったがキモくて売れなかつたアツザムパンが入つている)

「きつと赤い屋根の大きなお家に住んでもおもうんだー」

などと勝手に色んなことを言つている最中・・・

千夜の店の隣にあつた物置からシャロが出て来た。



「千夜ちゃん家の物置からシャロちゃんが出て來た」  
ココアはすらつと言つたが、当のシャロは顔を真つ赤にしており、  
マサキとリゼ、チノは若干顔が青くなつていた。  
(「(もしかして私(自分)達は大きな勘違いをしていた・・・?)」)  
「い、今まで勝手に妄想を押し付けを・・・、おつ、お嬢様とか関係なく私の憧れなのでっ!」  
(気遣わせちゃつてる)

「ところでシャロちゃん家はどこ?」

この流れでココアのこの発言、マサキは思わずココアの頭を疑う。  
(コー!コホオーー!(ココアの奴まだ気付いてないのか、あのアホオー  
!!))

「この物置よ!!」

シャロも堪らず大声で叫んでしまった。

◇◆◇◆◇

今日は無事にパン祭りが終わつて良かつた。

私は部屋に戻り、電気をつける。

ベットの上の棚には銃を背負つたワイルドギースが置いてある。  
最初はぬいぐるみに銃を背負わせる事が、おかしい趣味だと思つて  
いた。  
が、やつて来た真樹は明らかに人肌が多い女の子のプラモデルに銃  
を背負わせていたのだ。

(・・・意外と、言うほど気にすることでもないのかな)

街は宝箱。

今日は休み  
天気は快晴

午前8時24分

真樹は布団に潜つていた。

テレビをつけてもくだらない番組ばかり。

『きょうの料理はニンジンの・・・』

『本日お台場において・・・』

『本日のハレトーネークは・・・』

やめだ、昼まで寝ることにする。

すると勢いよくドアが開かれた。

「真樹！休みをダラダラ過ぎますな!!!」

紫髪の少女が入つて來た。

ああヤダヤダ、プライバシーつてもんが無いのは。

「なんですか？」

「こんな天気のいい日なのにまだ寝ているお前を起こしに来た！」

「そう」

「なんだその腑抜けた返事は！起きろ！」

軍隊式のレッスンでその性根を叩き直してやる！」

「嫌」

「いいから起きろ——！」

そう叫ぶと布団を引き剥がしにかかる。

「わかつた起きる起きる。」

ベットから半分ズレ落ちた自分は氣怠そうに言いながら起きた。

◆◇◆◇◆◇

やあいい天気だ。

しかしこうして1分間ぼんやりしている間にもアフリカでは60秒経っているのである。

そんなくだらない事を考えている時でも紫髪の少女は話しかけてくる。

「折角だから昼まで近くを歩いてみるか！」

そういうとズンズン先へ歩いていく。

そういう自分はのつたらのつたら歩いているから見る見るうちに距離が開く。

「おつ?!おい!何のんびり歩いてるんだ!いくぞ!」

そう言われ、手を引かれながら街の中を歩く。

ビビ割れ、穴が空いたレンガ垣。

川に係留されている小舟。

屋根の上で羽休めをする小鳥達。

のんびりと歩いていると、突如リゼが此方を振り向いた。

「そう言えば真樹つて、シストをした事あるか?」

「しすと?さあ、なんだいそれは?」

「シストっていうのはな!・宝探しだ!」

シストというのは、Aが街中に小物を入れた宝箱を隠し、その場所を地図に記す。その地図を頼りにBが宝箱を見つけたら、その中身をBの持っているものに交換するというものらしい……

「ふーむ、面白そうだ、それは」

「だろーだろー！、そして偶然にも古本屋の本に挟まってるのを見つけたんだ！」

そう言いながらリゼは折りたたまれた紙を見せてきた。

「よくまあ見つけたもんだ。んじゃ昼飯でも食つたら探してみようか」



シストの地図を開いてみると、ヒントを表す図形が描かれていた。赤と青の星が瞬く地で巨人兵が作られる。

と書かれている。

「なあ真樹、わかるか？」

「これねえ・・・」

うん、どう見ても星はタミ〇だ。

そしてこの巨人兵というのはガン〇ムの類だろう。

「うんうん、解った」

「本当か？何処だ？」

「こっら辺だつたよな。プラモ屋あるの」

真樹は以前リアルタイプゲルググを買った玩具屋を探す。

「あつた！」

「これが！青い星と赤い星つて！」

リゼは驚きながら紙と看板を何度も見る。

「地図通りならこっら辺にあるはずなんだけど

真樹は店周りを探す。

あつた。

古びた宝箱を模した小箱を見つけ出し、開く。

そこを開けると空であった。

「空ですか。・・・なんだ紙が貼つてあるよ。」

箱の内側に新たな紙を発見する。

紙には幾つかの図形が書いてあつた。

「この図形はなんだ？」

「これは大通りのお菓子屋さんの看板じゃないか？。行つてみよう！」

◆◇◆◇◆◇

店前に来たが何も無い。

「と思ったら、紙の裏に地図があつたでござる。」

そこにはこの店の路地裏に続く地図が書いてあつた。

◆◇

裏に周り、地図に記されているところに來たが、子供1人入るぐら  
いのサイズであり、とてもじや無いが高校生が入るにはキツすぎる。

「ここだ。」

「ちょっと狭く無いか？」

「だな、だから上からよじのぼつてみよう。」

よつ！

と、真樹は壁をよじ登り、そのまま壁の向こう側に落ちた。

「大丈夫か？」

「あつたぞ宝箱。」

そう言いながら扉の穴から宝箱を渡す。

リゼと真樹は待ちに待つた宝箱を開けた、その中には・・・

甘兎庵の割引券、肩叩き券、おもちゃの勲章、ウサギの置物などが  
入つていた。

「いろいろ入つてるもんだな」

「これ昔私が入れたやつじゃないか？」

そう言うとリゼさんはおもちゃの勲章を見ながら言つた。

「いつの頃だい？」

「そうだな・・・大体10年ちょっとになるか？」

「年代物だね」

「懐かしいなあ、あの頃は私も小さかった・・・」

「そう言い、リゼさんは遠い所を見ているが現在でも充分若いのだ。

「何故そんな昔を懐かしむような顔をしているん？」

「・・・はっ！」

遙か彼方に飛んでいた意識を戻したりゼは真樹の方を見る。

「おつといけない、思い出に深く浸つてしまつていた」

そういう箱の中に自分が持つて来た宝物を宝箱の中に入れれる。

「そんでは、自分も」

真樹も宝箱に景品のガンダムの生首を入れた。

「それじゃ、また素の場所に戻そうか」

そうして宝箱は元の場所に納められた。

◆◇◆◇◆

気が付けば既に4時を回っていた。

「どうだ真樹？ 楽しかったか？」

「んむ、まあ1日部屋で転がるよりかは有意義だつたかな」

「つまらん奴だなあお前は」

そう言いながらリゼさんは笑う。

「さあそろそろ帰ろうか。もう直ぐご飯の時間だしな」

◆◇◆◇◆

その日の夜。

真樹はリゼさんから貰つた昔の勲章を壁に飾つた後、満足そうな顔をして眠りについた。

髪は大体搔き上げる派です。

突然ですが皆様、わたくし狭山真樹は無事二年生に進級することができます。

と言うわけで高校生4人と中坊3人とお茶を飲みに行くことになりました。

8人中男1人に対し女7人、男女比おかしくありません？

◆◇◆◇◆

「と言ふわけで・・席が混んでいてチノ達とは席が離れてしまつた

「何を説明口調で話してるんだ？」

「ふふふ」

「それで真樹は進級できたのか？」

「NO problem この私を見縫つちゃあ困る」

他愛も無い会話をしていると、ふとココアがソワソワし始める。

「何だか妹を取られている気がするよ、すいません！」

そういうと店員さんに、チノ達の席にアフタヌーンティーセットを持つて行く様に頼んだ。

「なしてチノ達に・・・？」

「お姉ちゃんのとしてのイニシアチブをとるんだよ！」

「w」

◆◇◆◇◆

「して、ココアさんはガンバレル方式とインプローション方式なら何方がお好きか？」

「わ、私はガンバレル方式の方が好きだな！」

「あら、私はインプローション方式の方が好きだわ」

「いつ、今時核爆弾の起爆方法の仕組みの暗記なんて楽勝よね」

「お、お前ら何の話をしているんだあ?!」

「何って核爆弾の起爆方法だが?」

「高校生にもなればこんなのが当たり前よね」

「ねーー」

吉高客  
が

結局客が引いてきたので店員さんに頼み机を置いて貰いノンシー  
快傑。

因みに私はアフタヌーンティーセットは最初にしたのサンドイッチから食べました。作法とか知らん。

そんなことがあつたのが数日前

ある日の事自分とリセさんに対しチイは相談してみた

「ココアならいつも変だろ」

「そりゃなんですか、それは軸をかけて変なんですか……」

敏になつてゐる。分け目も逆だし。

「本物ならばこうすれば抱きつくはずだ。」

リゼさんはチノにぬいぐるみを括り付ける。

成る程  
これでかからぬ二二アはいないたるう  
まさにホイホイにかかるゴキブリの如し！

「眞面目に仕事しなきやダメだよ！」

手で顔を隠して、いる様子を見る

ふもふが足りぬのだろう。

パンでも切りに厨房へ向かつた。

「しかし、張り切りすぎてオーバーヒートしても知らんぞ」

「真樹！ココアが熱出して倒れた！氷をくれ！」

ほらね。



「つまりしつかりしている所を姉に見せたかったのか。」

「ココアさんのお姉さんって厳しいんですか？」

「こんな頭のネジ山が舐めた様な奴が妹じや厳しくもなろう。」

「安心して！ 淫く優しいよ！」

もしかしたら舐めさせた張本人やもしれぬ。

「お兄ちゃんも2人いるんだけど駆けて従えている姿がかっこいいんだー！」

「調教師か」

成る程女帝か。



Q

明後日姉が来る、だからしつかりしたところを見せたい。

A

ココア以外のラビットハウスのメンバーが少し抜けた姿を見せれば相対的にココアがしつかりしている様に見える。

まあ、なんと天才的な考えなんざましょ！

「と言うわけで・・・ココア／新メニューでサンドイッチの具とパンを逆にした逆サンドイッチを作ったけどどうかな？」

「私は算数苦手ですから間違つてコーヒー豆を1トンも注文してしまいました」

「ココアー、パンつて火炎放射器でも焼けるかなー？」

「こんな3人見てられないよー！」

「お前の為やぞお！」



偶然来店しており、事の顛末を聞かされていた千夜とシャロは感慨深そうに話していた。

「出会いのきっかけは栗羊羹だつたわね

「そういえば栗羊羹で釣れたつて言つてたわね」

(そつか・ココア達と知り合つてなかつたら、先輩と今ほど遊んだりできなかつたのかな・・・。・・・ん?)

「真樹とはどういう経緯で知り合つたんだつけ?」

「えーーと、そうね・・・あら?」

「ココア達の背景にいつもいて特に流れで出会つた感じよね?」

「そうよね・・・特にいてもいなくとも変わらない感じじや・・・?」

「そ、そんな事言つちやダメよ!」

◆◇◆それからどうしたの◆◇◆

2日後

「うつさぎ〜」うつさぎ〜☒

木組の家と石畳の街に1人の女がやつて來た・・・

あの姉来やがつた！

「さて、今日がココアの姉上が来る日だが……」

真樹は何となく緊張しながら皿を洗っていた。

「お姉さん遅いですね……」

そう、今の時刻は2時半もう既に来ていてもおかしくない時間帯だ。

「…………もしかしたら道に迷つてゐるのかも!」

そう言うやココアは外に飛び出していつた。

A vertical column of eight diamond shapes, alternating between white and black.

「そろそろ会えたかしら？」

真樹はほんやりしながら待っている

「そういうやつにいる皆は一人っ子なんだよね。兄弟姉妹がいるのってどんな感じなのかネ」  
……お姉ちゃんが、

「成程……、もし私に姉がいたら……想像もつかないな」

いです……」「

確かに  
(藁)

「自分に兄かあ確かに想像もつかんよ。ただまあ不思議と姉や妹と一緒にいる様子は想像できるんだがね……」

リゼさんは僅かに照れながら小突いてく

「しかし……最初あれだけふわふわしてたココアが姉にしつかりした所見せようとしてんだから、仲のいいお姉さんなんだろなあ」「そうだな……最初は道に迷いまくつていたココアがな……なんだか頬もしく見えるよ」

ピコン

「かわいいウサギを見つけたよ！」

おおん、姉はどうしたのさ。忘れたんか。

呆れながらケータイから目を離すと客が入つて来た……のだが。

「いらっしゃいま……？ ウイ!?」

デカい鞄を持った観光客と思しき女性が入つて來たのだが、顔をサングラスとマスクで隠すようにしていたのだ。

「すわ、強盗か……もしくは指名手配犯……」

「やはり真樹もそう思うか……怪しい奴だ……」

「なんで二人して物騒な事しか考えられないんですか……」

そういうている間にも謎の女性乙ゼータは時折店内を見渡したり

ブツブツ言いながらメニューを見ていた。

「やっぱやばい人だつて！ 警察よぶべ！」

「すいませーん、注文良いですか？」

「!!」

「……もう、私が行きますから真樹さんは厨房に、リゼさんはここで待機してください」

そういうと二人はチノに敬礼し持ち場へと散る。

◇◆◇◆◇◆◇◆

「真樹さん、「ココア特製厚切りトースト」をお願いします。」

「はい。チノちゃん、奴さんに不審な点は？」

「ありませんから大丈夫ですよ……」

適当にあしらわれながらも真樹はトースト作成に取り掛かる。

ココアが作つた食パンを丁寧に決められたサイズで切り落とし、大型オーブンでこんがりと焼き上げる。

そして焼きあがつたトーストに切れ目を入れバターを乗せ……最後に蜂蜜をかける。

シンプル、だからこそ求められる技量が高い料理なのだ。  
さあ喰らえい！

……はむつ

「……」のパン、モチモチが足りない……」

「このパンモチモチが足りない！」

そう叫ぶと乙は突如立ち上がりバックを開け放つ。なんとその中にはビニール袋に入つた白い粉が！

「やつぱり運び屋じやあないかッ！」

「この小麦粉で本当のパンの味を教えてあげる」

「だ……誰だ！」

Zはマスクとサングラスを取る。

「私です！」

そこにいたのは……やつぱり知らない人であつた。  
誰!?

何なのこのお姉さん?  
誰なの?怖いよおツ!!